

キャンプ研究

第15巻

2012年1月発行

Japan Journal of Camping Study

Vol.15

Jan. 2012

キャンプ研究

第 15 卷 2012 年 1 月 31 日発行

目次

特集 グリーフキャンプ

- 子ども達の悲しみを支えるということーグリーフキャンプの試みにむけてー…………… 3
坂本 昭裕
- 東日本大震災の被災者を対象とするグリーフキャンプの取り組み…………… 15

実践報告

- キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み…………… 27
西島 大祐
- 大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題…………… 31
仁藤喜久子
- カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状…………… 37
川口 博行
- Hole in the Wall Camps …………… 43
～病児キャンプの世界的ネットワーク～
テリー・ディグナン

資料

- 「キャンプ研究」投稿規程…………… 55
- 「キャンプ研究」収録題目一覧…………… 58
- 日本キャンプ会議発表題目一覧…………… 61
- 編集後記…………… 64

キャンプ研究第 15 巻 PDF について

本 PDF の内容について、ページ単位での印刷は可能ですが、テキストおよび画像のコピーはできないよう設定していますので、ご了承ください。転載等を希望される場合は、日本キャンプ協会にお問い合わせいただきますよう、よろしくお願いいたします。

また、冊子の販売も行っておりますので、入手を希望される方は、日本キャンプ協会へお申し込みください。

お問い合わせ先：社団法人日本キャンプ協会

電話：03-3469-0217 メール：ncaj@camping.or.jp

特 集

グリーンフキャンプ

子ども達の悲しみを支えるということ

ーグリーンキャンプの試みにむけてー

坂本 昭裕 (筑波大学人間総合科学研究科)

akihiro SAKAMOTO

1 はじめに

1.1 東日本大震災における喪失の悲しみ

人間がこの世を生きてゆくということは、ある意味、誰かと出会い、そして別れてゆくことの繰り返しであると言えるのではないだろうか。この世に命を授かり、死を迎えるまでの間に多くの人に出会い、そして別れてゆく。このことは、決して避けることのできない私たち人間の運命であろう。そして、自分自身さえも生滅して、そのままとどまることがゆるされない存在であることは言うまでもない。

鎌倉時代の随筆家で歌人だった鴨長明は、『方丈記』で「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖すまと、またかくのごとし」と書き、移りゆくものはかなさを詠った¹¹⁾。私たち日本人には、古来より、このような世界観が心の奥深くに根ざしており、これを「無常観」と呼んでいる。

しかしながら、たとえ私たち日本人が、このような世の中の無常さを理解していたとしても、また喪失の体験が不可避であることを知っていたとしても、心の支えになっていたような大事な人を突然、思いもよらない形で喪うしなってしまったとしたらどうであろうか。どんなにか驚嘆し、動揺し、混乱するであろう。あるいは、その事態を受け入れることができずに、全く否認してしまうこともあるかもしれない。いずれにしても、やがて、果

てしない深い悲しみに暮れるであろうことは想像に難くない。

東日本大震災では、多くの人々が一瞬のうちに命を喪うことになってしまった。被災された方々の失ったものは、人の命に限らない。それは、家、家財道具、田畑、家畜、ペット、さらには、故郷、職、転居によって別れてしまった友人知人、はたまた夢や希望など、有形無形のものすべて失われたといっても言い過ぎではないであろう。

さらに、東日本大震災にあっては、地震、津波といった自然災害による喪失の悲しみだけではない。東京電力福島第一原子力発電所の原発事故は、悲惨な放射能汚染を引き起こしてしまった。これは人為災害である。人為災害では、悲しみ以上に、大きな怒りや恨みが生じる²²⁾と言われており、実際、原発周辺で被災された方々は、悲しみと同時に、強烈な怒りを体験されている。東日本大震災では、これまでの震災による被災者はもとより、これまでに誰も経験することのなかった、未曾有の心の体験を被災者に強いることになってしまったのである。

1.2 グリーンキャンプにむけて

折しも日本キャンプ協会は、創立 45 周年を迎え「次の 100 年に向けた贈り物」となるキャンプを検討している最中に、東日本大震災に直面した（どこか共時的で、運命的な意味を連想してしまうが）。そしてこのような事態にかんがみ、被災した子どもたちの心のケアを目的とした「グ

リーフキャンプ」に向けてプロジェクトを立ち上げたとのことである。多くの被災した子どもたちを目前にして、何らかの形で支援できないかと考えることは、ごく自然なことであつたらう。その経緯と概要については、キャンピング 141 号に述べられている¹⁷⁾。

しかし、実施にあたっては、いくつかのクリアすべき問題点も指摘できよう。たとえば心のケア（グリーフケア）を導入したキャンプとは、いったいどのようなキャンプになるのであろうか。プログラムや実施期間はどのようなのだろうか。そして、キャンプのなかで被災児童（家族を喪った子どもたち）のグリーフワークを支援するとは、どのようなことなのか。また、その支援にあたるキャンプカウンセラーのトレーニングやセルフケアはどうするのか等々である。

かつて阪神・淡路大震災のとき、キャンプを通じて子どもたちの心のケアを実践した福田氏は次のように述べている³⁾。

「確かに、阪神・淡路大震災の後、私たちはキャンプを通じて、震災に遭った子どもたちの『こころのケア』に少なからず貢献できたものと思っています。とはいえ、1人で寝られず2人でひとつのベッドに寝る男の子たちを、私たちは見守ることしかできませんでした。・・・(中略)・・・『こころのケア』と言いながら、実はふだんのキャンプと変わりなく、私たちは子どもたちに寄り添っただけなのだ、と今さらながら気付くのです。ですから東日本大震災に際しても、私たちは自分たちの限界を認識するとともに、改めて『私たちにできること』をいまここでしっかりと考える必要があると思うのです。」

福田氏は、きわめて本質的なことを述べている。すなわち、キャンプで「できること」と「できないこと」を十分に認識しておく必要があるということを指摘している。実際に、キャンプですべてできるわけではない。キャンプは万能ではないのだから。むしろできないことのほうが多いかもしれないのである。しかしながら、一方でキャンプが役に立たないかというところでもなさそうである。子どもたちにとって、意味あるなんらか

の体験になるのも事実である。「少なからず貢献できた」と語る福田氏の言葉以上にキャンプが役立つこともある。キャンプをしている人ならば経験的に知っているであろう。キャンプには限界と可能性がある。

いずれにしても、グリーフキャンプについて、キャンプ協会が「あせらず、ていねいに¹⁷⁾」準備を進めていることは、非常に大切なスタンスであると思われる。また、アメリカの先行事例について調査研究を進めていることも重要なことである。繰り返しになるが、深い悲しみを抱えた被災児童のケアを目的として関わるためには、相応の準備をする必要があるからである。

このように、本稿では、キャンプカウンセラー、あるいはキャンプに関わる大人たちが被災した子どもたちの喪失体験をいかに理解し、キャンプでいかに関わればよいかなどについて考えてみたい。以降では、まず、グリーフについて一般的な知識や理論について説明する。続いて、子どものグリーフについて理解を深めたい。さらに、米国におけるグリーフケアの実践例について紹介したい。

2 グリーフを理解する

まずは、本プロジェクトのグリーフキャンプの先行詞となっているグリーフ (grief) について明らかにしておく。

2.1 グリーフとは何か

グリーフとは、喪失体験によってもたらされる精神的、社会的、そして身体的な反応である⁹⁾。日本語では悲嘆という。またこれに類する言葉に悲哀・喪 (mourning) もあり、意味の異なる言葉（例えば、死別を喪、生き別れのことを悲哀として分類することもある）として扱う研究者もいるが、本稿ではこれらも同義に扱う。

悲嘆は、先述のとおり喪失感により引き起こされる反応（表 1 参照）を意味するが、別の言い方をすれば、たとえば、大切な人を喪ったときの「体験」とも言える。それは、単に精神的な負の感情の体験ではなく、だるさ、食欲の増減、不定愁訴などの身体的な体験、また、社会的な孤立感、霊的な感覚など幅広い体験を指す⁹⁾。

表1 子どもの発達段階におけるグリーフ反応

年 齢	発達段階	死の概念	悲嘆反応	問題行動のサイン
2~4歳	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心的 世界が自分中心に回っていると信じる。 ナルシスト的 死を理解することができない。 	<ul style="list-style-type: none"> 死は永遠ではなく、自分は置いていかれたのだから、元に戻せると思う。例：「ママが死んだの知ってる？ママいつ帰ってくるの？」 	<ul style="list-style-type: none"> 激しいが短期的な反応 現在としての捉え方をずる 世話をされる中で変化に敏感に気づく 繰り返し同じ質問をする 	<ul style="list-style-type: none"> 退行 食事や睡眠のパターンが変わる おもらし 全体的にいらいらしたり困惑したりする
4~7歳	<ul style="list-style-type: none"> 自主性の芽生え 自分の外へ世界を広げる。 言語の習得 空想や幻想 自分から進んでできると思う 罪悪感 	<ul style="list-style-type: none"> 死をまだ元に戻せるものとみなす 死の人格化 望みや思考から出てくる責任感 例：「私のせいかも、ママが死ねばいいと思ってたから」 	<ul style="list-style-type: none"> より言語化できる 過程に大きな関心がある どういうふうになぜ？と繰り返し質問する 何も起こらなかったように行動する 全体的に悲しみ困惑する 	<ul style="list-style-type: none"> 退行 悪い夢を見る 睡眠と食事の障害 暴力的な遊び 故人の役割をしようとする
7~9歳	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な思考 自信を持ち始める 社会性の始まり 認識力の発達 論理的思考の始まり 	<ul style="list-style-type: none"> 死を罰とみなす 体が傷つくことへの恐れ 難しい移行の時期でもある。 死が未だ元に戻せるものと思いたいが、永久的だと理解し始める 	<ul style="list-style-type: none"> 細かい問いかけ 詳細をすべて知りたいという気持ち 他人がどう反応するかに関心がある 何がふさわしい反応の仕方かと自問する モーニングを理解し始める 	<ul style="list-style-type: none"> 退行 友達と距離を取る 睡眠・摂食障害 体のことを非常に心配する 自死の思考（故人のそばに行きたいという思い） 自分の役割について混乱する
11~18歳	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決がきちんとできる 抽象的思考 個の確立 	<ul style="list-style-type: none"> 大人としての見方 抽象化できる 死を概念化し始める 教訓の意味が分かるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> 落ち込む 否定 退行 家族や仲間以外の人たちと話したがる 伝統的なモーニング 	<ul style="list-style-type: none"> 落ち込む 怒り。親に対する怒り。言うことをきかない 以前の教えを退ける。 役割の混乱 問題行動

(©The Doogy Center, 2008 より引用改変)

悲嘆は、誰もが体験することであると同時に、誰もが強いストレスを感じるものである。このストレスによって、遺された人は、精神的にも身体的にも一定の期間において悲しみの後遺症を示すと言われている¹²⁾。

そして、悲嘆に積極的に適応してゆく過程をグリーフワーク (grief work)、あるいはモーニングワーク (mourning work) と呼んでいる^{7,18)}。精神分析学者のフロイト (Freud) は、対象喪失に引き続いて、失った対象への思いや懐かしみ、絶望、怒りなどだけでなく、生前の相手に対する自分の行いをめぐって後悔や償いの気持ちをたどり、喪った対象への心の整理をすることの大切さを説いている¹⁸⁾。モーニングワークは、このような心の課題に取り組むことを指す。したがってモーニングワーク、あるいはグリーフワークは、

受身的な反応ではなく、喪失の事実を受けとめ、様々な感情を表現し、心理的に適応（筆者は、おさめるといふ表現をよく使う）してゆく積極的な過程である。‘喪の作業’は、正常な悲嘆の経過であり、健康な状態に回復する過程である。しかし、全く同じ状態ではないので、回復というよりは、‘適応’と考えるほうがよいかもしれない。正常な悲嘆は、自然回復するので一般的には専門家の援助は必要としない。むしろ過剰な関わりや介入は、正常反応をそこなうことがあり、自然に任せることの大切さも指摘されている¹³⁾。

通常、悲嘆は病気とは考えられていないので、震災における「PTSD」や「うつ」などの疾患の対応とは異なる。しかし、正常な悲嘆過程のいずれかの段階で悲嘆がとどまった状態や強い悲嘆反応がみられたり、逆に悲嘆の欠如、遅発が考えら

れたり、悲嘆の統合が妨げられているような状態は、複雑性悲嘆¹³⁾と呼ばれている(全体の10%程度であると言われている¹³⁾)。このような場合は、PTSDとの併発が疑われることもあるため、医療機関での治療対象となる。したがって、キャンプが適用かどうかは、医療機関と十分に相談する必要があるだろう。

2.2 悲嘆過程の理論

喪失後の悲嘆の過程については、いくつかの理論モデルが示されている。モデルは、あくまでもモデルであり、人間の現実をわかりやすくするために大雑把に構成したものにすぎない。大切なことは、理論を参照枠として、目の前にいる子どもの理解に役立つことにある。また、複雑な悲嘆や適応が難しい悲嘆を理解することも可能になる。

理論モデルを取り上げておきながら、矛盾するが、理論をひとりの子どもにあてはめることには慎重であらねばならない。実際には、子どもの悲嘆は、個人差が非常に大きい。喪失によって心を痛める期間や強さは、一人ひとり異なっている。

1) 悲嘆の4段階モデル

ボウルビィ(Bowlby)は、死別による悲嘆として4つの段階を示している¹⁾。それは、①感覚の喪失の段階、②強い思慕と探求の段階、③混乱と絶望の段階、④再建の段階である。

第1段階の感覚の喪失は、直後から1週間程度であり、大切な他者の死を受け入れられない。一方で冷静な状態にも見える。第2段階では、喪失を受け入れ始めると同時に、故人を追い求め、強い思慕、執着を示す。これが数か月間続く。第3段階は、文字通り混乱と絶望である。喪ったものが二度と戻らないことに失望する。しかし、一方で喪われたことの現実には気づき始める。そして第4段階は、故人が自分の中で、悲嘆と願望などで揺れることなく適切な形で内在化する。社会適応も進むとされている。ボウルビィは、悲嘆の終了まで2~3年を要するとしている。

2) 悲嘆の課題モデル

ウォーデン(Worden)は、喪失後の適応過程を一連の課題の達成と考えた²⁴⁾。段階モデルと

は異なり、現象の生起の順序は規定していない。それは、①喪失の現実を受け入れること。②悲嘆の痛みを消化していくこと。③故人のいない世界に適応すること。④新たな人生を歩み始める途上において、故人との永続的なつながりを見出すこと、としている。悲嘆は、上記の4つの課題を達成した時に終了するとしている。ウォーデンは、4つ目の課題を何度か修正しているが、その修正に至ったことを次のように述べている²⁴⁾。

「亡くなった親と話したり、親のことを考えたり、親の夢を見たり、そばで見守ってくれていると感じている子どもが多くいたことに驚かされた。死別後2年を経過しても3分の2の子どもたちが亡くなった親が見守ってくれているように感じていた。・・・(中略)・・・カウンセラーの仕事は、心の中の適切な場所に故人を位置づけることを手助けすることである。」

ウォーデンは、喪われた人について、苦痛を感じることなく思い出せることが課題達成の1つの目安であると述べている。

次に、悲嘆の段階、課題というような直線的なモデルとは異なるモデルについて紹介する。

3) 意味の再構成モデル

ニーマイヤー(Neimeyer)は、喪失を体験した人の悲嘆が回復へと段階的に進行するものと考えることへの限界を先行研究から指摘し、大切な人を喪失したことや故人のいない世界の意味を再構成してゆくことが悲嘆過程であると論じた¹⁶⁾。意味の再構成とは、たとえば、喪った大切な人との関係を作り直し、揺さぶられている自分の人生を一貫性のある物語に書き直す(意味づける)ことであると述べている。

悲嘆過程の達成とは、段階モデルのように完了するというようには考えない。たとえば、故人への強い思いが無くなるということではなく、故人への象徴的な絆が持続することの肯定的な意味を認識できるようになることであるとしている。

4) 二重過程モデル

ストローヴェとシュッツ(Stroebe & Schut)は、死別体験者は、愛する人物の喪失に自ら対処しなければならないだけでなく、死の二次的結果とし

て生じる変化に適応するために、生活上の大きな修正を余儀なくされることに注目した²¹⁾。この喪失に対処（コーピング）することと、変化する生活に対処することは、いずれもストレスや不安の原因となりうる。前者は、喪失体験それ自体に対処する（たとえば、グリーフワーク；故人を思い出して泣いたりする）ことをさし、これを「喪失志向コーピング」とした。また、これに対して、たとえば、生活を立て直すためにさまざまなことを手配し、新しいアイデンティティを発展させるようなことを「回復志向コーピング」とした。この2つのコーピングは、関連はあるものの同時に取り組むことは無理で、ある時点におけるコーピングは、喪失志向か回復志向のいずれかに対処していると考えられている。したがって、悲嘆過程の二重過程モデルとは、このような喪失志向コーピングと回復志向コーピングの間を揺らいだり、あるいは2つのコーピングにも対処しないこと（喪失とは関係のない全く別の活動）の間を揺らいだりすると説明している（図1）。

子どもの喪失への直面化は、集中的に続くのではなくて、たとえば、新たな学校生活という変化への対応といった新たなストレスへの取り組みに紛れて行われることになる。悲嘆の過程では、喪失志向コーピングと回復志向コーピングは、時間の経過に伴い、通常、喪失コーピングから回復コーピングへと重心が移ってゆく。喪失志向コーピングに費やす時間は徐々に減少するが単なる直線的な減少ではない。折に触れて、悲嘆が

再発するなど変動を伴うものであるとも説明している。

3 子どものグリーフを理解する

つぎに、子どものグリーフについてより実際的に検討する。

3.1 悲しみを抱える子どものころ

大切な人を喪った子どものグリーフの大まかな特徴については、表1に示した。以下では、もう少し具体的に検討したい。

グリーフを抱える子どもたちは、キャンプに来ても一見しただけでは、なんら普通の子どもたちと変わらないように見えるであろう。しかし、深い悲しみを抱えている子どもの中には、活動し始めると^{注1)} 何らかの形でグリーフを表すものがある。子どもたちは、自分の気持ちを言語で表現できるとは限らない。年齢にもよるが、むしろ語らない（語れない）子どもが多いのではないだろうか。

永井は、遺児となった子どもたちの反応を3タイプに分類した¹⁵⁾。それは①不健康児型の反応、②心配無用児型の反応、そして③問題児型の反応である。

①不健康児型

ある7歳のAくんが、擦り傷を消毒して、包帯を巻いてもらっていた。それを見ていた8歳のBくんが「僕にもやって。僕も痛いから」と寄っ

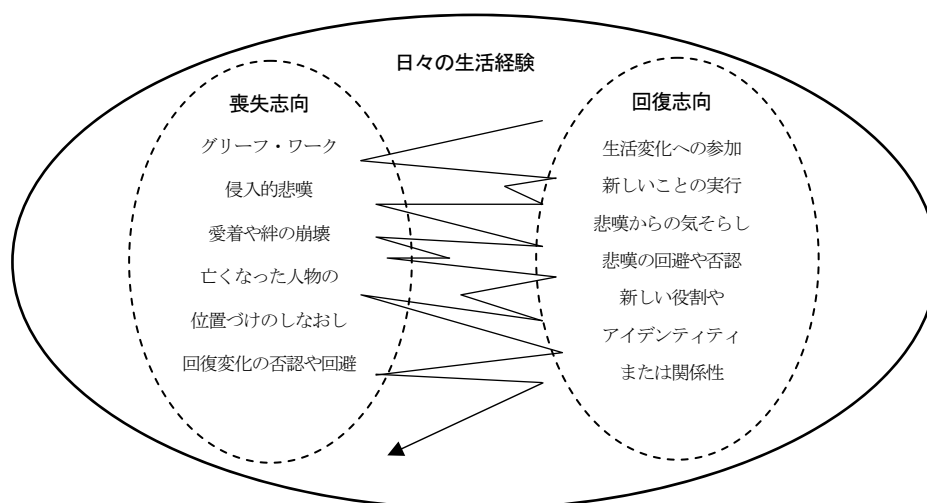


図1 死別への対処の二重過程モデル (Strobe & Schut, 2007)

てきた。

不健康型の反応は「身体化」である。頭痛、腹痛、身体の痛みなどの訴え、食欲不振、不眠、夜尿などが認められる場合がある。また、痛みの表現と合わせて、年齢よりも子どもっぽくなった振る舞い（退行）を見せることもある。言葉にできない不安や心配事が、身体の痛みや体調の変化として表われる。深く悲しむということは、精神的、身体的な痛みをともなうものである。グリーフの過程では象徴的な痛みを訴える。

②心配無用児型

14歳のCさんは、母親が亡くなった後、父親と弟のために母親の役割を引き受けることになってしまった。炊事や洗濯など家事についてよく知っているのは彼女だけだった。Cさんは、父親や弟のために役立つならばと喜んでいて、学校生活も一生懸命だったが、部活動は家事のため続けられなくなった。また、友達と遊んだりする時間も以前よりもぐっと減ってしまった。ときおり、ふっとした瞬間に、理由はわからないがこぼれ落ちる涙を止められなかった。

心配無用児型は、ある意味、悲しみや悼み^{いた}を「抑圧」しようとしている。これは、一見何事もなかったように元気であり、むしろ周囲に気を遣う良い子であるようにふるまう。周りからは、グリーフワークが終結していると思われがちである。しかし、ぽっかり空いた穴を必死に抑えようとしているか、あるいは、痛みを切り離している。心の痛みを直視しなくて済むようにいつも以上ががんばってしまうのである。

③問題児型

16歳のDくんは、震災後、何事にも無気力で、以前は熱心だったことにも打ち込めなくなってしまった。どこか、他人任せになってしまう。ボランティアに参加しても「どうせそんなことしたって」「やる意味が分からない」など自暴自棄な態度が見られるようになった。

問題児型の反応は、「問題行動の行為化」であ

る。不従順な行い、ルール違反、破壊的な態度、あるいは時に暴力や自傷等などの手におえないような問題行動で表現する。このような行動の背景には、「どうして自分が生き残ったのか」「なぜ親が亡くならなければならなかったのか」などの、怒りや罪悪感、やるせなさ、無力感など様々な感情がないまぜになっている。周囲の出来事や人生を自分でコントロールできる感覚が弱く、あらゆる事が降りかかってくるように感じている。

以上、3つの型から子どものグリーフ過程における特徴的な表現について紹介した。子どもたちは、どれか一つのタイプに当てはまるということではない。状況によって様々な仕方で悲嘆を表現するものと思われる。

このような子どもたちの表現は、悲嘆という強烈な痛みから、自分自身を護る（防衛する）ための手段である。わたしたち大人は、子どもが時にはこのようなやり方でしか自分自身を護れないことがあるということを理解しておく必要がある。したがって、護りになっている表現手段を早急にやめさせようとするのは、かえって子どもたちの痛みを増悪させることもあることを知っておく必要がある。

3.2 子どものグリーフに影響する要因

子どもの悲嘆に影響を及ぼす要因はいくつかあげることができる²³⁾。たとえば、亡くなった人がどのように亡くなったのか、亡くなった人との関係（亡くなる前にその人とどんなことがあったのか）、あるいは、本人の年齢や性格特性などである。これらの違いによって、悲嘆過程が容易であったり、複雑になったりすると言われている。

今回の場合は、東日本大震災ということで、亡くなった原因は、ほとんどが災害（事故）によるものと考えられる。災害の場合は、安全感、コントロール不全感、恐怖、そして予測不能感などに対する問題が出てくると言われている²³⁾。子ども自身が地震や津波に巻き込まれた体験をしている場合は、トラウマの症状がでることもある。参考ではあるが、自死による場合は、自暴自棄、恥、社会的な不名誉などが課題になると言われている²³⁾。災害であれ、自死であれ、死体を目撃しているような場合は、トラウマとなっていることも考

えられる。

亡くなった人との関係は、家族それぞれで、かなり独自である。しかし、誰が亡くなったのかやその人との生前の関係は、グリーフに影響する。父親が亡くなったのか、あるいは母親が亡くなったのかによっても異なる。たとえば、幼児や低学年の子どもが母親を喪った場合は、不安、依存がより強く表現されるかもしれない。また、故人とのコミュニケーション、故人の養育態度、あるいは、故人の収入の程度などの要因は、子どものグリーフ過程に影響することが推測される。

子どもの年齢など、発達段階でグリーフが異なることはすでに述べたが、認知能力（例えば死の概念）や言語能力の発達の違いは、グリーフの表出の仕方に大きな違いがでる。したがって、このような能力の育っていない年代では、言葉による表現よりも遊びがグリーフのエネルギの放出に欠かせないであろう。一方、精神的発達がより進んでいる中高生では言語的な表現がより重要になるだろう。

子どもは、成長に応じて、形を変えてグリーフを繰り返すと言われている^{2,23)}。たとえば、言葉を獲得する前に母親を喪った子どもは、言葉を獲得すると気持ちを語ったり、考えたりすることで再度その死が頭に浮かぶようになることもある。また、思春期に達すると新たに獲得した抽象的思考によってグリーフを再体験することもある。

4 子どものグリーフへの対応

4.1 ダギー・センターの実践

ここでは、死別を体験した子どものための、米国で初めてのピアサポートセンター^{注2)}として設立されたダギー・センター（The Dougy Center）の考え方を紹介したい^{2,5,14,23)}。一般的なキャンプとは形態が異なるが、その理念や考え方を知っておくことは役立つと思われる。

ダギー・センターは、1982年に精神科医キューブラー・ロスに学んでいたベバリー・チャップルによって設立された。‘ダギー’という名称は、脳腫瘍を患いながらロス博士と書簡をやり取りしていたダギー少年にちなんで名付けられた。ダギー・センターの研修に基づいて行われているプログラムは世界中で500を超えるとのことであ

る¹⁴⁾。日本で遺児を支援している「あしなが育英会」は、このダギー・センターでの専門的訓練を受けた職員が心のケアプログラムを実施している¹⁵⁾。あしなが育英会は阪神淡路大震災の後、犠牲になった遺児たちのための施設として、‘神戸レインボーハウス’を開設したが、これはダギー・センターの理念に基づくものである^{注3)}。

岩本⁹⁾によると、ダギー・センターでは、子どもが安心して喪失感を表現できる安全な環境を提供することを最も大切な役割と考えている。ダギー・センターが主にすることは、ピアグループ活動であり、個人のカウンセリングやセラピーではない¹⁴⁾。ピアグループとは、同じ体験がある人たちがファシリテータと時間を共有し共にあることを通して、全体で「共同生成」（人間的成長）することである⁸⁾。見知らぬ者同士が、グループ活動に参加して、他のメンバーに自分の体験を開示し、同じ体験をしたメンバーも自己開示するのである。そうすることで、自己理解や他者理解を深めることをねらいにしている。子どもたちの中には、喪失を体験し、深い悲しみの混乱に「自分だけが辛いのではないか」「自分だけがおかしいのではないか」と感じる場合があるが、同様な体験をしている仲間のお話を聞くことによって、「自分だけではない」という、つながりの感情が生じてくることになる。

ダギー・センターでは、参加する子どもたちは、年齢、死別の種類などでグループに分けられる²³⁾。プログラム（サポート・ミーティング）は、1回90分（3歳～5歳は75分）で、大きく3つのパートに別れている¹⁴⁾。最初の15分は①オープニング・サークルといい、グループで自分の体験（グリーフに関する体験）について話す時間である。次の60分は②自分の好きな活動をする時間である。そして、残りの15分は③クロージング・サークルという振り返りの時間にあてられている。これらサポート・グループは毎回決まった儀式や定番の手順で行われている。それは、日課のようなお決まりの作業によって、子どもたちが安心することができて、適応のプロセスに入っていけるからだと考えられている²³⁾。

4.2 サポート・ミーティング

①オープニング・サークル

オープニング・サークルでは、毎回、自分の氏名と年齢、誰がどのような原因で亡くなったかを話すことから始まるが、話したくない場合はパスできる。このパスのルールは、いつでも有効である。12歳までの子どもの場合、自分のグリーフ体験を話す場合は、オープニング・サークルの時だけで、しかもそれは、簡単に短く述べるのがほとんどということである。サポート活動のメインが、子ども自身が選んだ次に紹介する自由活動の時間と考えられているからである¹⁴⁾。

②自由活動

オープニング・サークルの後、1時間は自分の好きな活動をするが、ダギー・センターには、いくつかの部屋が用意されている^{9,14)}。

- トーキングルーム・・・ソファやぬいぐるみが置いてある。ぬいぐるみを手にしながら自由にお話ができる。
- サンドルーム・・・砂遊び。
- ゲームルーム・・・主に身体運動の部屋。卓上ホッケー、トランポリンなどができる。
- アートルーム・・・芸術活動の部屋で、絵画、工作などができる。
- ボルケーノ（火山）ルーム・・・激しい感情表現ができる部屋で、サンドバック、ボクシンググラブ、大きな人形などが置いてある。怒りや悲しみを安全に表現できるようにしてある。
- プレイルーム・・・人形などを使ってごっこ遊びができる。

ダギー・センターは、悲嘆における反応は情緒的、精神的な影響をもたらしているが、同時にこれは身体的な反応を引き起こしており、グリーフでは、まず身体での表現を必要としていると考えられている⁵⁾。たとえば、汗が出る、眠れない、泣く、食べられないなどは、必要とされた反応であるということである。グリーフでは、したがって、泣くこと、大きな声をだす（わめく）こと、歩くこと、走ること、掃除をすること、歌うこと、スポーツなどで体を動かしたり、遊んだりすることこそが、子どもにとってはグリーフを表現するこ

とに、最も適した‘言語’だと考えている⁵⁾。子どもが解決しなければならない課題は、行動や態度で表現され、遊びを通して成し遂げられるということである。芸術活動、あるいはスポーツ活動についても同様である。

芸術活動であれば、子どもが、絵、粘土などなんらかの媒体を用いて表現するそのことが、グリーフ・ワークと考えられている。スポーツ活動ならば、スポーツにおける身体の動きそのものがグリーフの表現である。どのような活動を選んで、どんな表現をしたいかは子ども自身が見つける。いずれにしても、子どもの活動を、喪失にとまなう痛みを表現する言葉として理解することが大切であると説明している。

ファシリテータは、評価するまなざしでなく、何かを達成させなければならないわけではなく、子どもが様々な活動という手段を用いながら、自分を表現している過程そのものに従事し、楽しむことを支援する姿勢が求められている⁵⁾。そして何よりも、このような活動を通じて表現されたものをしっかりと受け止めてもらえたと、子どもが感じることができたかが重要なのである。

③クロージング・サークル

クロージング・サークルでは、当日行った活動を話し合って終わりにする。体験を深めるようなファシリテーションがなされるが、もちろん、ここでも、話したくなければ、話さなくてもよく、本人の気持ちが尊重される。

自由活動の時間もそうであるし、このようなサークルでは、「人の話を聞く」「人をけなさない」などのルールを徹底している^{2,9,23)}。またダギー・センター内で話したことは、口外してはいけない（プライバシー等に対する同意書は、参加する前にサインするとのこと）。これらは、子どもたち、あるいは大人たちが、身体的にも、感情的にも安全を確保できるようにすることがねらいである。安全は、とても重要な要素である。それを通して、子どもたちは信頼を深め、不安定な感情をも表現できるようになるからである。

4.3 子どもたちの活動を支援するための心得

ダギー・センターの子どもたちの活動を支援するための心得²³⁾ について紹介しておこう。これらの

要点は、キャンプ・カウンセリングにも充分通じるところがあると思われる。

1) 遊びは子どもたちにとってはグリーフの仕事であるということ。

子どもたちが遊んでいるときにとる行動は、子どもたちが現実と直面している問題や葛藤の表れであるという視点を忘れない。子どもたちが現実を克服してゆくためには、行動で表すことがよい解決方法になるということ。

2) 遊びは繰り返されるということ。

深い意味のある問題は、遊び（活動）の中に何度も反復して現れる。子どもたちがその問題を解決してしまえば、もう遊びの中には現れず、他の遊びへと移行する。

3) 子どもたちに「安全のためのルール」が大切であることを告げ、安全に遊ばせること。

ルールは、簡潔ではっきりしたものにして提示する。ルールがあいまいになればなるほど、子どもたちは混乱する。

4) 子どもたちに自ら行動させること。

活動は自分で選ばせて参加させる。迷って決められないことも過程の中で大切なステップなので、大人は辛抱強く待つこと。

5) 気づくこと。

あなたがどう感じているかに気づきながら活動に参加する。あなたがその活動をどう思うか、心配や不安がないか、怒りを感じるか、コントロールしようとしているかどうかなど、常に気をつけていること。あなたと子どもたちに安全が確保されているかを確認する。活動が安全でないと感じたら、中止させるか、他のファシリテータと交代する。

6) コミュニケーションは直接的な表現で行うこと。

批判したり、非難したりしない。遠回しな表現はさけて、わかりやすく直接的な表現を使う。子ども自身が使った言葉で、その内容をリフレクション(いわゆるおうむ返し)する。子どもの言ったことがわからない場合は、確認すること。「・・・ということ?」「○○さんから見れば・・・なのね」など。

7) 秘密を守ること。

子どもたちとファシリテータのグループ内で

は、秘密は守られるということ子どもたちに知らせる。秘密を守るということは、センターの外部には漏らさないということである。それは、他のファシリテータやスタッフに知らせないということではない。

8) 子どもに寄り添うこと。

子どもたちを型にはめようとしたり、変えようとしたり、励まそうとしたり、教訓を教えたり、心理療法を行ったりしてはいけない。子どもたちに最大限寄り添ってゆく。

5 おわりに

グリーフキャンプとはいえ、その中味は、自然の中での体験活動が中心になることに変わりないであろう。ダギー・センターのグリーフワークにおける遊びの重要性からいえば、キャンプは有意義な活動となる。だから、これまでのキャンプの中にグリーフを抱えるための枠組みをいかに作るかということが課題になるだろう。グリーフを抱える枠組は、守秘義務や子どもたちへのルールだけでは不十分で、それは、カウンセリングマインドやキャンプの寛容さなどが基盤となって機能するものである。

ところで、ダギー・センターの実践例を紹介したので、死別を体験した子どもたちに、その体験を話してもらおうこと(デブリーフィング)がよいのかどうかという疑問をもつ人がいるだろうと思う。ダギー・センターにならって、日本のあしなが育英会では、「自分史語り」という自分の喪失体験を語り分かち合うプログラムを実践している。確かに、このようなプログラムは、参加者のグリーフを癒す、意義あるものになっているのかもしれない。キャンプにおいても、このような試みができればよいのかもしれない。しかしながら、ダギー・センターにせよ、あしなが育英会にせよ、このようなプログラムを実践するには、参加者全員が喪失(親を喪った)を体験している者同士によるピアカウンセリングであるということ、また、相応の研修を受けた者によってファシリテーションされていることを十分に心得ておく必要がある。

おそらく、同じようにやろうとしたらうまくいかないのではないかと思う。実際に人のつらい話

を聴くということは、そんなに簡単なことではない。人の話を聴くことの訓練を受けていない人が、凄惨な内容の話の話を聴いて共感できるだろうか。話してもらっただけ話させておいて、受けとめられないとなると傷口を広げることになりかねない。長年、惨事ストレスの軽減を図るねらいでグループワークを実践している廣川は、殉職者がでているような重篤な事案では集団に介入することは慎重を期すべきである⁶⁾と述べている^{注4)}。

‘子どもに寄り添う’ということを大切にすれば、こちらから何もせずに徹底して寄り添うことがよいように思う。doing (すること)ではなくて、being (いること)が大切であるように思う。子ども自らが語らない限り(語れないのに)尋ねることはしないほうが安全である。当然、語れる子もいるのであろうが・・・。

しかし、はからずも、子どもとの関係が深まってきて、子どもが自ら「僕はお母さんを喪ってしまったんだよ」とふっと語ったとき、これは、大事に聴いて受けとめなければならない。そしてこの時は、「そうか・・・。お母さんを亡くしたんだね。悲しいね」と返していくこともあろう。亡き人のことを語ることが心の回復になるというのは、あくまでも本人の意思で胸の内が語られる場合であろう。

かりに、喪失体験を振り返るプログラムを実施するにしても工夫が必要であろう。たとえば、「誰かに手紙を書く」とか、「これまでで一番うれしかったことを絵に描こう」など、大きなテーマを提示するといった具合である。このようなときに死別した人のことが表現されることもあるだろう。この時も、表現されたことをしっかりと受け止め、抱える心構えが大事である。

キャンプには、グリーフワークとなりうるプログラムがたくさんある。大切なのは活動プログラム(遊び)がグリーフの仕事になるという視点を忘れないことである。そうすると、共に山を歩いて夕日を眺めること、野に咲く花を見ること、鳥の鳴き声に耳をすませること、歌を歌うこと、ファイヤーの火をみんなで囲むことなど普段から行っていることが、喪の作業になりうるのである。

最後に、先述の廣川の文章⁶⁾からその一部を抜粋して紹介しておきたい。

海保職員のケアで釜石に泊まった晩、不意につけたTV番組「SONGS」に吉田美和が出ていた。「私は歌のプロなんだけど本当のことを言うと、歌の力を100%信じているわけじゃない。歌のプロの私でさえ音楽が何の力にもならない(くらい辛い)時があったことを知っている。それでも歌がなんらかの力になってくれたらいいと思っている」・・・

(中略)・・・吉田の言葉の「歌」や「音楽」を「心のケア」に置き換えて、高揚感、万能感を自戒しつつ、そっと差し出す「心のケア」をこころがけていきたい。

以上は、本稿の最初に述べたことと同じである。大切なことだと思うので強調しておきたいと思った。人には、キャンプでは癒しようもない悲しみもある。けれども人は、キャンプで希望を見出すこともある。

注1) 特に、キャンプカウンセラーとの関係が付きはじめるとその特徴が明らかになってくるものと思われる。

注2) ピアサポートとは、同じような課題に直面する人同士がたがいに支えあうことを指す。

注3) あしなが育英会では、仙台に、あしなが育英会東北事務所を開設し、東北レインボーハウス(仮称)の建設を目指すことが決定しているということである。

注4) 米国の惨事ストレス現場に向いた職員を集めてその時の体験を分かち合う場(デブリーフィング)の効果については、肯定的な結果が示されていない。無理に感情表出させることのマイナス面など、否定的な見解が多くなっている。しかし、廣川は、比較的軽度の事案で職場環境も安定している場合は、一定の効果が得られるように感じていると述べている。これは、被災者におけるデブリーフィングではないが、考え方そのものは参考になる。

文 献

- 1) Bowlby, J. (1980) Attachment and Loss Vol.3: Loss, Sadness and Depression, Basic Books. [黒田実郎訳, 母子関係の理論 III- 愛情喪失, 岩崎学術出版社.]

- 2) ダギーセンター (2005) 大切な人を亡くした子どもたちを支える 35 の方法, 梨の木舎.
- 3) 福田年之 (2011) 災害に遭った子どもたちへ, キャンピング, 社団法人日本キャンプ協会, 142, p.9.
- 4) 藤代富広 (2011) 喪失と悲嘆へのケア, 臨床心理学, 11 (4), pp.547-552.
- 5) 半田 結 (1997) アメリカにおける“Greif Education” (悲嘆教育) の理念と実践 - ダギー・センター、芸術教育、アート・セラピー -, 筑波大学地域研究, 15, pp.173-186.
- 6) 廣川 進 (2011) 惨事ストレスケア, 臨床心理学, 11 (4), pp.542-546.
- 7) 広瀬寛子 (2011) 悲嘆とグリーフケア, 医学書院.
- 8) 池田豊應 (2004) 不登校生徒へのアプローチ, 臨床心理学, 4 (4), pp.470-474.
- 9) 岩本喜久子 (2011) 親と死別した子どもへのかかわり - ダギー・センターに学ぶグリーフサポート, 児童心理, 金子書房, 941, pp.38-43.
- 10) 石井千賀子, 左近りベカ (2010) 子どもの悲嘆とその対応 - 積極的な受身の姿勢で寄り添う -, 緩和ケア, 20 (4), pp.343-347.
- 11) 鴨長明, 浅見和彦訳 (2011) 方丈記, ちくま学芸文庫.
- 12) 小西聖子, 白井明美 (2006) 「悲しみ」の後遺症をケアする - グリーフケア・トラウマケア入門, 角川学芸出版.
- 13) 丸山総一郎 (2011) 東日本大震災をめぐる精神医学的諸問題 - 死別悲嘆、トラウマ、放射線被曝のストレス評価再考 -, 産業医学レビュー, 24 (2), pp.47-84.
- 14) 水野修次郎 (2006) ダギー・センター全米所長ドナ・シャーマンさんの講演を聞いて - 死別体験をした子どものケア -, モラロジー研究, 58, pp.77-99.
- 15) 永井 亮 (2008) 日本の児童養護施設における「死別を体験した子どもたち」への専門的支援の必要性 - 米国の「ダギー・センター」と日本の「あしなが育英会」の実践を参考に -, ルーテル学院研究紀要, 42, pp.97-112.
- 16) Neimeyer, R.A. (Ed) (2007) Meaning Reconstruction and the Experience of Loss, American Psychological Association. [富田拓郎, 菊池安希子監訳 (2007) 喪失と悲嘆の心理療法 - 構成主義からみた意味の探求, 金剛出版.]
- 17) 日本キャンプ協会 (2011) グリーフ・キャンプ・プロジェクトの経緯と概要, キャンピング, 社団法人日本キャンプ協会, 141, pp.12-13.
- 18) 小此木啓吾 (1979) 対象喪失 - 悲しむということ, 中公新書.
- 19) 坂口幸弘 (2011) 悲嘆のプロセスを理解する, イー・ビー・ナーシング, 中山書店, 11 (4), pp.607-612.
- 20) 瀬藤乃理子, 黒川雅代子, 石井千賀子 (2011) 死別を経験した子どもたちへの援助 - 悲嘆の複雑化を防ぐために -, 腫瘍内科, 8(1), 51-56.
- 21) Strobe, M.S. and Schut, H. (2007) 死別体験へのコーピング (対処) の二重過程モデルから見た意味の構成, ロバート・A・ニーマイアー編, 喪失と悲嘆の心理療法, pp.68-82.
- 22) 高木慶子 (2011) 悲しんでいい - 大災害とグリーフケア, NHK 出版新書.
- 23) The Dougy Center (2008) Training Skills Manual, The National Center for Grieving Children & Families. [特定非営利活動法人レジリエンス監修, グリーフケア・マニュアル - 喪失の悲しみに向き合う -, 特定非営利活動法人レジリエンス]
- 24) Worden, J.D. (2008) Grief Counseling and Grief Therapy: A Handbook for the Mental Health Practitioner. 4th Ed., Springer Publishing Company. [山本 力監訳, 上地雄一郎, 桑原晴子, 濱崎 碧訳, 悲嘆カウンセリング, 誠信書房.]

東日本大震災の被災者を対象とするグリーフキャンプの取り組み

社団法人日本キャンプ協会

日本キャンプ協会では、日本YMCA同盟、朝日新聞厚生文化事業団とともに、東日本大震災で被害に遭われた方を対象にしたグリーフキャンプの取り組みを行っています。この震災の被害は甚大で広範囲にわたるため、復興にかかる時間は10年とも、それ以上とも言われており、被災された方々の心のケアも重要な課題のひとつとされています。そのため、このグリーフキャンプの取り組みについては、2012年から少なくとも数年以上、複数のキャンプを継続的に実施することを計画しています。

ここでは、その概要を紹介するとともに、このキャンプを行うことによって得られる副次的な効果についてもあわせて考えてみたいと思います。

グリーフキャンプとはなにか

「グリーフキャンプ (Grief Camp)」は多くの人にとってなじみのない言葉でしょう。「Grief」を辞書で引いてみると、最初に「人の死などによる深い悲しみ、嘆き、苦悩」という訳が書かれています。大切な人が亡くなったときには悲しい気持ちになるものですが、その悲しみがどのような影響を与えるかは、どのような亡くなり方であったかということや、その死を受け止める人の状況によってそれぞれに異なるものです。一般的には葬儀や納骨といった見送りのプロセスを経ることや仕事などの日常生活に戻ることを通じて、深い悲しみから徐々に脱することができるのですが、状況によってはそれがうまくいかず、いつまでも

大切な人を亡くした悲しみに苦しむ人もいます。そういった人のためのキャンプが、グリーフキャンプなのです。

グリーフキャンプについては、海外のキャンプ関係者とのやりとりを通じて知ることになりました。3月11日の地震発生直後より何通もの安否をたずねるメールが届き、その内容は徐々に「日本人たちのために、何ができるか？」というものになっていきました。

3月11日の夕方には、津波によって多くの人が亡くなり、行方不明になっているというニュースが流れていました。先に書いたとおり、悲嘆状態から抜け出すときに、葬儀や納骨といった見送りのプロセスは重要な役割を持ちます。しかし、自然災害という思いがけない出来事によって突然に大切な人を失い、十分な見送りのプロセスを踏むこともできない人が多数いることが予想されました。そこで、つらい状態から抜け出るための支援になるような、キャンプが役に立てることはないかと、メールを送ってきてくださった方々に問い合わせました。

その答えとして提示されたのが、グリーフキャンプだったのです。20年以上前から続けられているもの、2001年のアメリカ同時多発テロ事件を受けて行われたもの、病院とキャンプ場が協力して行われているもの、2004年にロシアで起こったベスラン学校占拠事件の被害児童を対象に行われたものなど、多数の情報が寄せられました。届けられた資料を読むだけでは具体的にどの

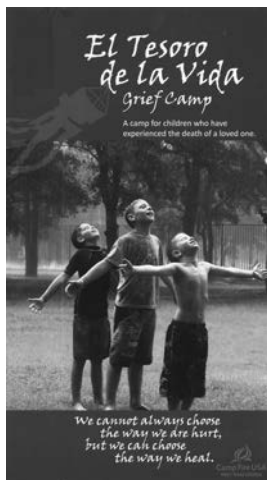
ようなキャンプなのかは十分には分かりませんが、断片的な情報を見るだけでも、日本キャンプ協会として取り組むにふさわしい事業であると感じられました。

いくつものグリーフキャンプに関する情報のうちのひとつ、El Tesoro de la Vida というキャンプのパンフレットには以下のフレーズが書かれています。

We cannot always choose the way we are hurt, but we can choose the way we heal.
 私たちは傷つく方法を選ぶことはできないが、癒す方法は選ぶことができる

被災した方たちは思いがけず、悲しみに直面することになってしまいました。その悲しみを癒す方法として選んでもらえるようなキャンプに取り組むことは、日本キャンプ協会にとって意味あるチャレンジとなります。

2011年、日本キャンプ協会は創立45周年を迎え、「Gift for the Next 100 Years」を合言葉に、次の世代に受け継ぐキャンプをつくる取り組みを始めていました。そして2011年は、組織キャンプ150周年の年でもありました。1861年、アメリカの教育者フレデリック・ガンが、自らが主宰する学校の生徒たちと移動型キャンプを行ったのが組織キャンプの始まりと言われています。そのときからキャンプは、人の成長や社会的課題解消のための方法として、常に人と社会にかかわり続



El Tesoro de la Vida のパンフレット

けてきました。

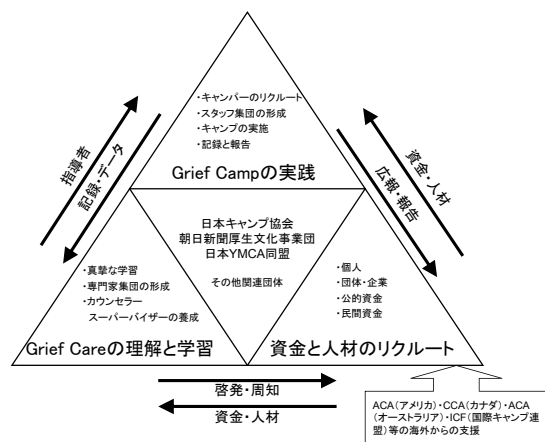
Gift for the Next 100 Years、つまり、次の100年に向けた贈り物となるキャンプはどんなものだろうか？今、私たちが暮らす社会の中にはどんな課題があり、キャンプに何ができるだろうか？そんなことを考えているとき、2011年3月11日に地震が起きました。

「贈り物」であるキャンプは、できることならば明るく楽しいものであってほしいと願います。しかし、目の前の現実を直視したとき、「生きていく中で直面することが避けられない悲しみと折り合いをつけて生きていく力を手に入れるためのキャンプ」であるグリーフキャンプの意味が浮かび上がってきました。

プロジェクトの実施体制

徐々に明らかになった被害は甚大で、復興には相当に長い時間がかかることが予想されました。それに合わせて長期にわたる事業を行うためには、日本キャンプ協会単独で行うには無理があります。そこで、この新しい取り組みについて説明をし、グリーフキャンプ・プロジェクトの立ち上げを日本キャンプ協会、日本YMCA同盟、朝日新聞厚生文化事業団の三者で取り組むことになりました。

日本のYMCAには90年を超えるキャンプの歴史があり、キャンプにかかわるスタッフやカウンセラーも多くいます。継続的に、そして広域的にキャンプを行うことを考えると、被災地域にも拠点があり、人的資源も豊富なYMCAとの協働は不可欠でした。



運営体制

一方の朝日新聞厚生文化事業団は、関東大震災の救援活動をルーツに持つ組織であり、日本の災害救援においては常に大きな役割を果たしてきました。東日本大震災においても直後から募金を行い、独自の救援事業を立ち上げていました。グリーンキャンプについても、三者の共同事業と位置づけ、当面のキャンプ実施に必要な費用の大きな部分を担うことになりました。

もちろん、YMCAにも災害救援の幅広い経験があり、朝日新聞厚生文化事業団にも長きにわたってアサヒキャンプを行ってきた歴史があります。この三者の組み合わせは、東日本大震災の被災者を対象としたグリーンキャンプ・プロジェクトの立ち上げにおいて、この上ないものと言えます。

エル・テソロ・デ・ラ・ビダ

手本としての El Tesoro de la Vida

キャンプを行うことは決めたものの、どのようなキャンプをすればよいのかは白紙状態でした。震災の後、夏休みにかけて被災地の子どもたちを対象としたキャンプは非常に多く行われ、中には心のケアをテーマに掲げるものもありました。しかし、そういったキャンプが、私たちが行おうとしているグリーンキャンプと同じものなのかどうか、正直、自信がありませんでした。確かに、自然の中で思いっきり楽しむことは、元気を取り戻すためにとても有効ですが、それがそのままグリーンキャンプになるというわけではないという気がしました。

やはり英文の資料だけでは分からないことが多いと思っていたところ、「El Tesoro de la Vida に見に来ませんか」との誘いを受けました。

El Tesoro de la Vida は、Camp Fire USA First Texas Councilが1988年から実施しているグリーンキャンプです。Camp Fire USAは1910年に設立された歴史ある団体で、キャンプだけでなく、幼児教育や学童保育のような子育て支援の事業も活発に行っています。そうした地域社会とのかかわりの中で「家族を失った子どもの精神的ケア」という課題に着目し、このキャンプを始めました。El Tesoro de la Vida はスペイン語で「いのちの宝物」という意味ですが、El Tesoro は団体の所有するキャンプ場の名前でもあります。つまり「いのちについて考えるキャンプ」「いのちを見つめるキャンプ」という意味が込められているのです。

キャンプは1週間の宿泊型で、2011年は7月31日から8月6日までの日程で行われました。キャンパーは、近親者と死別した経験を持つ6歳から17歳の93名。彼らは、地域の小児病院や司法機関、グリーンケア・センター（カウンセ

プロジェクトの概要

事業名

Gift for the Next 100 Years キャンプ・プロジェクト
災害に遭った子どもたちのためのグリーンキャンプ

目的

1. 東日本大震災の被災者にキャンプを通じたグリーンワークの機会を提供し、心の復興の支援を行う
2. 社会的課題の解決に取り組み続けてきた組織キャンプ150年の歴史を基盤としつつ、新しい社会とのかかわりを模索する
3. 国内のキャンプの質を高めたり、新しい課題に取り組んだりするきっかけとなるようなさまざまな実践への関心を高め、国内外の団体等との連携を深める

期間

2011年4月から数年間（5年以上を目標に、被災地の復興状況に合わせて継続的に実施する）

実施方法

- ・ 海外の先行事例の研究と国内で実施するための調整作業
- ・ 指導者のトレーニングおよび教材の整備
- ・ 一般の支援者を含む広く社会に向けた啓発活動（キャンプアカデミーなど）
- ・ 被災児童（特に家族を失った子どもたち）を対象としたキャンプの実施
- ・ 国内外に向けた事業報告の実施と継続に向けた検討

主催

社団法人日本キャンプ協会・財団法人日本YMCA
同盟・社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団

リング等のグリーフケアを行う民間団体) などを通じてキャンプの情報を得て、参加しています。死別の理由はさまざまで、病死、事故死、自殺、薬物等の過剰摂取、そして殺人というケースもあります。



El Tesoro de la Vida ロゴマーク

思いきり楽しんでいい

キャンプの初日、全員が集まる最初のセッションで、主任セラピストが「つらい思いをしているのはあなただけではないから、その気持ちを表に出していいんだよ」ということと、「思いきり楽しんでいいんだよ」ということをキャンパーに伝えます。子どもたちの多くは、近親者を亡くしたことで生活環境が大きく変わったり、学校でいじめられるといった経験をしています。そのことが原因で、家で亡くなった人の話ができなかつたり、泣くことができなかつたり、楽しむことに罪悪感を持ったりと、悲しみを十分に表現できず実年齢以上に“大人”であることを自分に課している子どもたちもいるのです。



最初に「楽しむ」というルールを確認する

その気持ちを解きほぐすように、みんなで「楽しんでいいんだよ」ということを確認しあうのです。そして、その言葉のとおり思いっきり楽しめます。乗馬やプール、クラフト、アーチェリーといったアクティビティはもちろん、食堂に集まったときも、ちょっとした空き時間にもあちこちから歓声があがっています。

しかし楽しさは、ただ単に年相応の“子ども”に戻るために必要だというわけではありません。このキャンプでは、毎日1時間、プロのセラピストによって進められるグループセラピーの時間が設けられています。基本的にはどのような感情であっても、今の気持ちを表現することが目標となるのですが、年齢や性別、そのときのキャンパーの雰囲気などに応じて行うことはさまざまで、ときにはキャーキャーと歓声をあげてゲームをするようなこともあります。また、誰もが斜に構えて、ほとんど何も起こらないという時間もあります。それでもキャンプの生活を通じて、より親密な関係ができることが作用するのでしょうか、やがて大切な人のことを思い出しながら涙を流すような場面も出てきます。亡くなった人のことを思うのはつらい作業です。もちろんセラピストは個々の状況に合わせた支援を行うのですが、それと同じくらい大切なのが楽しさなのです。

キャンプ最後の夜に行われたグループセラピーは少し重苦しいものになりました。亡くなった人のことを思い出し、全員が泣き、そして肩を抱き合い、互いにいたわる姿も見られました。それは周囲のスタッフが涙を流すほどの、切ない時間でした。



思い出すのは少しつらい作業だが
そんなときもセラピストが個別に対応する

ところが、それから1時間もしないうちに、彼らはさっきまで泣いていたことをすっかり忘れたかのように、プールで盛大な歓声をあげていました。「プールで飲んだことはナイショだよ」と、キャンプディレクターが差し入れた缶ジュースに、歓声はさらに大きくなります。

亡くなった人との大切な思い出を取り出して悲しみ、楽しいことに大騒ぎして気分を切り替える。それを繰り返すことで、悲しみは少しずつ整理されていくのかもしれませんが。そのためにも、思いきり楽しむことが必要なのです。



楽しい時間が気持ちを切り替える

キャンプであることの意味

キャンプでの1週間を通じて感じたのは、「グリーンキャンプは、どのような感情でも表現していいことが保証されている、楽しさに満ちあふれたキャンプである」ということです。決して「悲嘆状態にある子どもたちを治療するためのキャンプ」ではありません。ですから、楽しいということが何よりも大事にされていたわけです。楽しさはキャンプが本来的に備えている特徴と言えるでしょう。そこに、悲しみを自分なりに整理して、日常性を取り戻していくグリーンワークの場としてのキャンプの優位点のひとつがあると言えます。

また、お互いに気持ちをさらけ出してもいいと思えるような信頼関係を築くうえで、生活を共にするキャンプは大いに役立ちます。セラピストの1人に話を聞くと、「心理の専門家の立場から見ても、このキャンプはととても興味深い」と言っていました。グループ内の関係が日々ダイナミック



いつも楽しげな歓声が響いている

に変化していて、週1回のセラピーでは半年以上かかることが、1週間できてしまうこともあると言います。

また、組織キャンプが持つ「補完性」も大いに役立ちます。キャンパーの心理面のケアは主にセラピストが担いますが、それだけではありません。ときには、プログラムスタッフがその役目を担うこともありますし、ほかのキャンパーがその役目を果たすこともあります。多様な役割を持つ人がかかわる組織キャンプだからこそ、キャンパーの個性に容易に対応が可能となるのです。

そして、忘れてならないのが自然です。空気がカラカラに乾燥したテキサスでは、真夏でも天の川がくっきり見えるほどに星がきれいに見えます。空を見上げて、思わず「ほお」と声を出してしまうほどに見事な星空でした。キャンパーが意識していたかどうかは分かりませんが、最後のグループセラピーで彼らが泣いている間も、満天の星空が私たちが包むように広がっていました。



生活を通じてダイナミックな関係の変化が生じる



多様なスタッフが補完性を担保する

理論的な説明は難しいですが、自然の存在がこのキャンプを支えていると感じられる瞬間でした。

キャンプの計画と課題

実際のキャンプについては、本稿の執筆時点（2011年12月）ではまだ詳細は決まっていますが、2012年春の開始を目標に準備を進めています。

2012年 グリーフキャンプ計画案概要

1. キャンプの実施

東日本大震災の被災者（特に家族を亡くした子ども）を対象にグリーフキャンプを実施する。

対象：社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団が東日本大震災で両親を亡くした子どもに贈る「子ども応援金」の申込者のうち20～30名

日程：2012年3月から年間3回もしくは4回

※同一メンバーを中心に複数回の実施を予定。対象はキャンプの実施体制等の充実を鑑みて、無理のない範囲で徐々に広げる。

2. 研修等の実施

キャンプのスタッフを対象にした研修や、広く一般に向けた啓発を目的とする研修会等を実施する。

- ・キャンプスタッフを対象とした事前研修の実施
- ・年間2回程度のフォーラムおよびワークショップの実施

3. 広報活動等

活動を記録し、キャンプ関係者ならびに広く一般の理解を得るための広報活動を必要に応じて、効果的に進める。

- ・会報誌やウェブサイトなどの媒体を通じた進捗状況報告
- ・中間報告書の作成・発行
- ・各種取材対応
- ・ファンドレイジングに向けた取り組み

4. その他

グリーフケアセンターなど、キャンプ期間以外にも被災者を支えることのできる仕組み作りに向けた、他団体等との協働を模索する。

もちろん、この計画を継続的に行うためにはさまざまな課題があります。

そのひとつは「人」です。El Tesoro de la Vidaにおいて、特に重要な役割を担っていたのが6人のセラピストでした。グループセラピーの時間を担当するだけでなく、個々のキャンパーへの対応、カウンセラーに対するスーパーバイズ、そして、保護者に対する中間報告も彼らの役目であり、その責任はたいへんに大きなものです。しかも非常に感心したのは、彼らがキャンプにごく自然に溶け込んでいたことでした。少し話ただけで、彼らがこのキャンプの意義を深く理解しており、このキャンプが好きでたまらないということが伝わってきました。日本でグリーフキャンプを行う場合も、彼らのような存在は欠かせません。キャンプを愛し、キャンパーとともに楽しんでくれるセラピストとつながり、よい協力関係を築くことは、大きな課題のひとつです。

また、人に関しては、ボランティアの存在も重要です。El Tesoro de la Vidaではおよそ70人のボランティアが参加していましたが、その多くは何年も継続して参加している人たちです。それぞれの役割を果たしながら、さりげなく補完性を



El Tesoro de la Vida のセラピストたち

発揮する様子には感心するばかりでした。このようなボランティア集団を作るといふことも必要と
なってくるでしょう。

次は、「金」の課題です。El Tesoro de la Vida の場合、キャンパー 1 人あたり、およそ US\$1,000 の費用がかかるとのこと。約 100 人のキャンパーがいるこのキャンプでは、およそ 800 万円が必要だといふわけです。このキャンプの参加費は US\$520 で、さらに費用免除を受けているキャンパーも多いため、参加費でこの費用をまかなうことはできず、資金集めも重要なポイントとなっています。私たちが進めているグリーフキャンプについては、当初の 1～3 年分の費用確保はできていますが、その後のことは未
定です。長期的な取り組みにするためには、どうしても資金集めの方法について考えなければなりません。

そして、「環境」の課題もあります。El Tesoro de la Vida では、The Warm Place というグリー

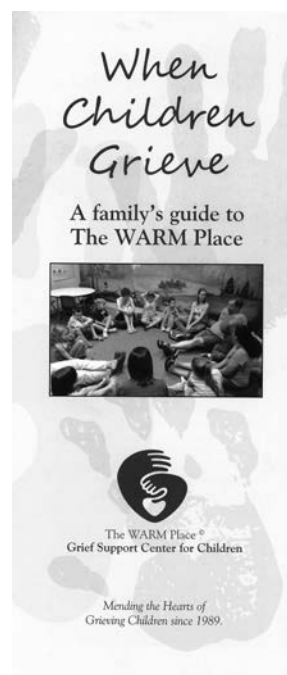


「このキャンプの時期に休みが取れないような仕事には就かない」といふボランティアもいる



資金集めには PR も欠かせない
私たちも地元新聞の取材を受けた

フケア・センターが、継続的にキャンパーの対応にあたることになっています。つまり、キャンプ後に保護者が気になることがあったときに、気軽に相談できる場所が確保されているということです。ところが、日本では残念ながらグリーフケア・センターにあたる施設がほとんどありません。キャンプを離れたところでの支援が行える環境をどのように整えるかは、非常に大きな課題です。キャンプを継続的に行う中で、環境整備に向けた提案、取り組みを進めることが大切だと考えています。



The Warm Place のパンフレット

ここにあげた「人」「金」「環境」という3つは、世界中どこでもあるような、どんなキャンプでも抱えている課題だと言えるかもしれません。

しかし、日本で行うことを考えた場合、さらに日本特有の課題が見えてきます。

ひとつは、感情の表現方法です。El Tesoro de la Vida では「どんな気持ちでも表現していい」というルールがありました。また、グループセラピーにおいても、手法は年齢や性別に応じてさまざまでしたが、基本的に気持ちを表現することが意図されていました。しかし、一般的に日本人は自分の気持ちを表現するのが苦手だと言われます。もちろん、アメリカの子どもたちも、最初はなかなか表現しようとはしませんから、セラピストはさまざまな方法を試みるわけですが、日本の子どもたちの場合は、より難しい可能性があります。表現方法や場の設定など、さまざまな試行錯誤が必要になってくるでしょう。

最後のひとつは、「ハグ（抱擁）」に代わるものです。El Tesoro de la Vida では、うれしいとき、悲しいとき、怒りがいっぱいになったときなど、さまざまな場面でハグが大きな力を発揮していました。ハグは共感を示したり、安心を与えたりするには最良の方法です。しかし、いざ自分がやるとなると、照れくささが先に立ってしまいます。ましてや日本人同士でするとなると、完全に尻込みしてしまいます。

キャンプを通じて関係性が深まるにつれて、日本で行うグリーフキャンプでも、ハグが重要な役割を果たすようになるでしょう。けれども、もっ



話したり、文章にしたり、絵を描いたり
表現の方法は多様にある

と気軽に「あなたのことを理解しているよ」「とても悲しかったんだね」「とっても楽しかったね」といった気持ちを伝えることのできる、照れくさくない方法は何だろうと今も考えています。



El Tesoro de la Vida ではあらゆる場面で、
ハグが大きな役割を果たしていた

アウトリーチするキャンプ

(プロジェクトの副次的効果)

実際のキャンプはやってみなければ分からないというところがありますが、本稿の最後では、このプロジェクトの副次的効果について考えてみたいと思います。

前項であげたように、日本でグリーフキャンプを行うためには、心理や医療などの専門家や関連団体との連携、ボランティアのあり方、ファンドレイジング（資金集め）といった課題に向き合うことが必要です。そのことは、キャンプを行う団体の運営のあり方を問い、よりよい運営を模索することにつながります。これは、グリーフキャンプを行うことで生じる副次的効果のひとつだと言えるでしょう。

また、もう少し広い視点で考えてみると、「アウトリーチするキャンプ」を育てることになるのではないかと思います。アウトリーチ (Outreach) とは、英語で「手を伸ばす」ことを意味する言葉です。福祉などの分野における地域社会への奉仕活動や、公共機関の現場出張サービスなどの意味で多用される言葉ですが、必要などころに出かけて行う取り組みといったイメージです。

現時点で、「グリーフキャンプ」は新しい言葉であり、グリーフキャンプに対するニーズは、被

災された方々の中で自発的に意識されることはないでしょう。しかし、私たちがキャンプというリソースを使って被災された方々にアウトリーチする（手を伸ばす）ことで、キャンプに新しい価値を与える可能性、そして、新たなキャンプへのニーズを生み出す可能性も出てきます。

慶應義塾大学の加藤文俊教授の『キャンプ論～あたらしいフィールドワーク』という本の中に、以下の一節があります。

識字教育の実践家、理論家として知られるパウロ・フレイレは、私たちとの対話において、「世界に名前を付ける・命名すること」の重要性を説いている。私たちは、言葉を知ること、言葉をあたえること、言葉を発することによって、積極的に外界にはたらきかけることができる。（中略）ひとたび命名されたものは、課題として共有できるようになる。それがコミュニケーションを誘発し、私たちのやり取りを通じて、さらに「世界」をつくっていくのである。つまり、名前をつけられ、〈モノ〉として流通可能となった知識は、もちろん、それ自体にも価値はあるが、大切なのは、それが私たちの関係性を築く仲立ちとなって、コミュニケーションを継続させるという点だ。

「東日本大震災で被災した方々のために何かしたい」という気持ちを私たちのリソースであるキャンプに変換して、「グリーンフキャンプ」という名前を与えることは、キャンプの立場で東日本大震災の被災者支援にかかわるために何をするかを考え続けることに役立ちます。キャンプが社会の課題にアウトリーチすること自体は、これまでに何度も行われており、目新しいことではありません。しかし、名前を与えることで新たなコミュニケーションが生まれる可能性は大きいのではないのでしょうか。実践を積み重ね、ここで「グリーンフキャンプ」と呼んでいるキャンプに、もし新しい名前が与えられるとしたら、それは日本にグリーンフキャンプが根付いたことを意味するのかもしれない。

文 献

加藤文俊（2009），『キャンプ論 あたらしいフィールドワーク』，慶應義塾大学出版，P22.

実践報告

キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み

西島 大祐（鎌倉女子大学短期大学部）

Daisuke NISHIJIMA

1. はじめに

近年、自然体験や人間関係を育む活動が学校教育や保育の場で多く求められるようになった。学習指導要領や幼稚園教育要領、保育所保育指針などにも自然体験の重要性は示されているが、すべての学校や幼稚園、保育所などで充実した自然体験活動が営まれているかという点、なかなかそうとは言い難い現状があると思う。言うまでもなく子どもの生活において自然に親しむことは重要なことであるといえるが、それを指導・支援する教員や保育者の関わり方によって、子どもたちの学びや生活の質も大きく変わってくると考えられる。

さて、鎌倉女子大学短期大学部専攻科初等教育専攻では子どもの自然体験の不足といった近年の社会の動向に応えるべく、2006年度より教員・保育者を目指す学生に対し野外活動を多く取り入れたプログラムを展開している。その授業科目の一つとして大学内外の野外教育施設を活用した「キャンプ」があるが、この科目を履修することにより、(社)日本キャンプ協会公認のキャンプインストラクターの資格の取得を目指すことができるようになっている。

キャンプインストラクターは「キャンプでの活動（アクティビティ）を指導できる能力を持った指導者」であり、「基礎的な知識、技術、考え方を習得していると認定される者に付与」される資格¹⁾である。この資格はスポーツやキャンプの専門家のみが取得を目指すというものではなく、近年では教育・保育の場においてもその能力に対す

るニーズが高まり、課程認定校制度などを利用して資格取得を目指すケースも増えている。しかし一方で、キャンプインストラクターの資格を取得した教育・保育系の学生が卒業後どのようにキャンプの知識や技術などを活かしているか追跡調査をしている事例は少なく、現状を知る必要があるのではないかと考えられる。

本実践報告では、在学中に「キャンプ」の授業を通してキャンプインストラクターの資格を取得した卒業生を対象に意識調査を試み、教育・保育の現場においてキャンプの知識や技術がどのように活用されているかについて、その調査内容を一部報告することを目的とする。

2. 実践概要

2-1. 活動概要

2006年度から2010年度の5年間でそれぞれ行われたキャンプは「キャンプインストラクター養成講習規程」に則って開催されたものである。このキャンプではさまざまな野外活動体験を通して次の4つの資質や能力を高めることを求めてきた。

1. 豊かな人間性や感性を育めるような身近な自然体験の確立
2. 普段の生活を基盤とした日常の教育の場での野外の活用
3. 集団宿泊行事や遠足、園外保育への応用
4. 自然の偶然性に対峙できるような豊かな安全・危機管理能力

2006年度、2007年度に実施したキャンプでは特に学生自身の体験を重視し、大自然を肌で感じられるダイナミックな活動プログラムを展開した。しかしながら、現地までが遠いことなどから2008年度以降は実施場所を大学の近郊に移した。それに伴い活動プログラムは学生が指導現場に出た時に応用実践しやすいようより身近なものへと変更していった。2008年度には海ホテルの観察など東京湾を主体とした環境教育的な活動プログラムを取り入れた。また地元神奈川県で就職する学生が多いことを考慮し、2009年度からは神奈川県内の野外教育施設を利用し、学生が就職後実際に子どもたちを連れて活動することをイメージできるようにした。ここではキャンドル・ファイヤーの企画・運営を学生にすべて任せるなど学生主導のプログラムを多く取り入れることで、指導者としての企画力・計画力の育成を図った。²⁾

毎年度対象となる人数は10～20名程度で、開催回数は年1回であった。また企画・実施にあたっては、年度によってキャンプの地域や日程を変更するなど学生のニーズや学習要素、運営方法、プログラム内容などに対するさまざまな試みが行われ、その場所の環境や条件に合わせてアクティビティなどを選択し展開してきた。指導ス

タッフについては年度によって人数に違いはあるものの、大学内の専任教員と日本キャンプ協会公認の指導者が活動内容に合わせて4～8名で担当してきた(表1)。

なお、参加者全員がキャンプインストラクターの取得という目的を持っていたわけではないため、資格取得の要件を満たしていても自らの意思で資格の認定を受けない参加者もあった。

2-2. 調査対象者

2006年度から2010年度に行われた鎌倉女子大学短期大学部専攻科初等教育専攻の授業科目「キャンプ」を通してキャンプインストラクターを取得し、かつ卒業後に教育・保育の場に携わっている者を対象にして、調査協力を依頼した。その結果、卒業後5年目から1年目までの計10名の対象者(内、男性0名、女性10名)から有効回答を得ることができた(表2)。

2-3. 調査方法

調査対象者に対し、2011年7月に自由記述を含む質問紙による調査を行い、回答を得た。調査の内容は資格の継続状況、キャンプ指導者としての活動状況、キャンプ指導者としての意識の大きく3点に分類して集計した。

表1 キャンプ実践の概要

実施年	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
場所	国立妙高青少年自然の家		千葉県立大房岬少年自然の家	神奈川県立三浦ふれあいの村	
参加人数	11名	18名	17名	20名	21名
主なアクティビティの内容	野外炊事、テント泊 妙高山登山 冒険教育施設の活用 環境教育プログラム		野外炊事、テント泊 イニシアティブ・ゲーム 海ホテルの観察 ビーチ・コーミング	野外炊事、テント泊 イニシアティブ・ゲーム シーカヤック キャンドル・ファイヤーの企画・運営	
特徴	登山などの冒険教育的でダイナミックな活動を多く展開した。		協力・信頼というテーマの活動の他、環境教育的な活動も多く取り入れた。	企画力や計画力の育成を重視し、保育現場での指導実践に繋げやすい環境づくりを目指した。	

表2 調査対象者の構成

卒業後年数	5年目	4年目	3年目	2年目	1年目
人数 (%)	4名 (40%)	1名 (10%)	1名 (10%)	0名 (0%)	4名 (40%)

3. 結果と考察

調査対象者に対し、キャンプインストラクターの資格について「資格は現在も継続していますか？」と質問したところ、「継続している」という回答が全体の30%だったのに対し、「継続していない」という回答は70%を占め、資格の継続率の低さが伺えた(図1)。また、「継続していない」と答えた対象者に継続しない理由を質問したところ、「資格を活かす機会がない」という回答が多くを占めた。

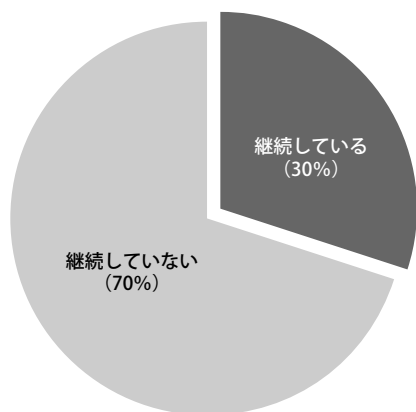


図1 資格の継続状況

表3 資格を継続しない理由

・資格を活かす機会がない (4名)
・確認する時間がない (1名)
・面倒 (1名)
・お金がかかる (1名)

次に職場で野外での活動や行事を企画・指導することがあるかどうかについて質問したところ、卒業後4年目～5年目の対象者については半数以上が「はい」と回答したのに対し、卒業後1年目の対象者については全員が「いいえ」と回答した(表4)。何年か現場での経験を積んだ教員

表4 職場での活動状況

Q.職場で野外での活動や行事を計画することはありますか？		
教員・保育者の年数	はい	いいえ
卒業後4～5年目	60%	40%
卒業後1～3年目	0%	100%

や保育者は野外活動の企画・指導にあたる機会が増えてくるが、新任の教員や保育者には野外での活動や行事を企画・指導する機会が少ない状況があるのではないかと考えられた。

また、どのような場でキャンプ指導者としての知識や技術が活かされているかについて質問したところ、親子遠足やお泊り会、園外保育の企画、野外炊事での火起こし、キャンプ活動、宿泊体験、チームを作り上げる時、災害時などといった回答があり、キャンプ指導者として知識や技術を活用している状況が伺えた(表5)。しかし「職場でキャンプ指導者としての知識や技術は活かされていますか？」という質問に対しては「はい」と答えた者はなく、キャンプ指導者としての知識や技術を職場で十分に活かすことができていない状況がある(図2)。

表5 どのような場で知識や技術が活かされているか

・親子遠足でのネイチャーゲーム	など
・お泊り会 (ハイキング)	
・園外でのお泊り保育の企画	
・野外炊事での火起こし	
・キャンプや野外活動	
・小学校での体験学習	
・子どもの遊びの補佐	
・災害時	

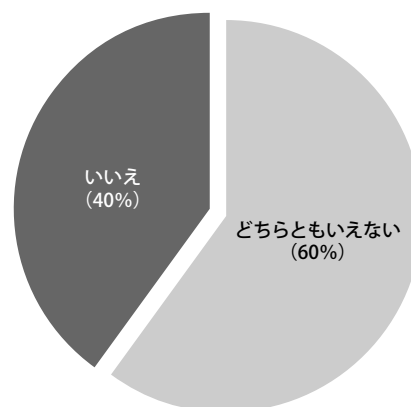


図2 職場でキャンプ指導者としての知識や技術が活かされているか

教育・保育の場ではキャンプや野外教育といった自然体験の活動が重要視されていながらも、若い教師や保育者は自然体験に関わる活動を指導・

支援する機会になかなかめぐり合えないと感じる現状があると考えられた。子どもたちが質の高い自然体験活動を受けられるようにするためにも、キャンプ指導者としての知識や技術を身につけた若い教師や保育者がもっと自然体験活動を指導する機会を持つことが重要ではないだろうか。またそのことによって若い教師や保育者がキャンプ指導の知識や技術のレベルを維持・向上し、情熱を持って自然体験プログラムを推進していくことができるようになるのではないかと考えられる。

若い教員や保育者が質の高い自然体験活動を実践するためには、彼らをサポートできる幅広い年代での自然体験の指導者が増えることも重要だと考えられる。学校や園全体で活動をサポートしていく意識も必要になってくるのではないだろうか。

4. まとめ

本実践報告では、キャンプインストラクターの資格を取得後、教育・保育の場に携わっている卒業生を対象にして、キャンプの知識や技術が現在どのように活用されているかの意識調査を試み、その調査内容を一部報告することを目的とした。

その結果、キャンプインストラクターを取得した卒業生が卒業後すぐにキャンプの知識や技術を活かす状況は少ないが、教育や保育の現場経験が増えるにつれて知識や技術を活かす状況が増えることが伺えた。また、キャンプ指導者としての知識や技術がさまざまなところで活かされていると考えているにも関わらず、職場ではなかなか活かされる機会が少ないと感じる状況があった。

教育・保育の場において若い教師や保育者が自然体験に関わる活動を指導・支援する機会になかなかめぐり合えないと感じる現状があるとすれば、キャンプ指導者としての知識や技術を身につけた若い教師や保育者は自然体験活動を指導する機会をより多く持つべきだと考えられる。子どもたちが質の高い自然体験活動を受けられるようにするためにも、キャンプ指導者のような自然体験の活動プログラムを有効に活用できる教員・保育者が今後さらに活躍する必要があるだろう。また、学校や園全体で活動をサポートできるよう、幅広い年代での自然体験の指導者も求められてくるだろう。教員や保育者がキャンプ指導者として

の知識や技術を維持・向上できるような研修活動を継続的に開催することも重要になってくるかもしれない。

今後調査を継続するためには卒業後教育・保育の場で活用できる実践的キャンプを継続し、調査方法などを精査する必要があると考えられる。キャンプ指導者の知識や技術が資格取得後にどのように活かされていくのかについてさらに実態を明らかにし、充実した自然体験活動を実践できる教員や保育者が増えるためにはどうすればよいか検討を深めていきたい。

引用・参考文献

- 1) (社) 日本キャンプ協会 (2011) 社団法人日本キャンプ協会公認キャンプインストラクター養成課程認定団体マニュアル 2011 年度版、日本キャンプ協会、10
- 2) 西島大祐 (2010) 保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み、キャンプ研究、日本キャンプ協会、14(1)6-7
- 3) 西島大祐 (2011) キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者を対象とした意識調査の試み、第 15 回日本キャンプ会議発表抄録集
- 4) 甲斐知彦、林綾子 (2009) キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告、キャンプ研究、日本キャンプ協会、12 (3) 11-18
- 5) 奥田訓子、小林一郎 (2011) 専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、14 (2) 55-66
- 6) 岡島成行、関智子 (2006) 自然体験活動の指導者制度導入が農山村の活性化に及ぼす影響 - CONE 初級指導者 (リーダー) を事例として -、野外教育研究、10 (1) 71 - 84

大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題

仁藤 喜久子（東京福祉大学）

Kikuko NITO

キーワード：大学生、野外活動、人間関係の構築

1. はじめに

東京福祉大学では、全学部（社会福祉学部・心理学部・教育学部・短期大学部）の新入生約 1,000 名を対象に、群馬県前橋市富士見町赤城山にある本学研修センターを利用して 2 泊 3 日の宿泊研修を実施している。この活動は、開学以来、伊勢崎キャンパス及び池袋キャンパスの学校行事として毎年継続して実施している。（実施概要－表 1、研修内容－表 2）

本研究は、平成 22 年 7 月 22 日～ 24 日・26

日～ 28 日に実施をした、社会福祉学部保育児童学科（池袋キャンパス）111 名の学生の取り組みについての現状を報告するとともに、質問紙調査を実施した結果をもとに、次年度（平成 23 年）に実施する研修内容の改善に資することを目的とする。

表 1. 実施概要

東京福祉大学赤城山宿泊研修 概要（学校行事）	
● 目的：	① 集団宿泊研修を通して教職員と学生、学生相互の人間関係を構築する。 ② 野外活動の体験を通して、レクリエーション指導者に必要な知識・技能を身につける。
● 日程：	2 泊 3 日 ※平成 22 年 6 月 7 日～8 月 9 日の期間で、各学部・学科ごと 17 団に編成し、実施。
● 場所：	群馬県前橋市富士見町赤城山 東京福祉大学研修センター（収容人数約 100 名）
● 対象：	全学部新入生（社会福祉学部／心理学部／教育学部／短期大学部） 伊勢崎キャンパス及び池袋キャンパス在籍 約 1,000 名

表2. 平成22年度池袋キャンパスプログラム

<p>1日目</p> <p>AM 集合／池袋出発</p> <p>PM 昼食／赤城山研修センター到着／開校式 レクリエーション活動① (学生スタッフ*主催)</p> <p>夕食</p> <p>アカデミックアドバイザーとの集い</p> <p>入浴／リーダー会議／消灯</p>
<p>2日目</p> <p>AM 朝の集い／朝食／清掃 ハイキングへ出発／昼食(鳥居峠)</p> <p>PM 赤城山研修センター到着／夕食 キャンプファイアー(学生スタッフ主催)</p> <p>入浴／リーダー会議／消灯</p>
<p>3日目</p> <p>AM 朝の集い／朝食／清掃 手紙書き(保護者宛に葉書作成)・まとめ レクリエーション活動②(学生スタッフ主催)</p> <p>昼食</p> <p>PM 閉校式／研修センター出発／池袋到着／解散</p>

*学生スタッフ：宿泊研修の活動は、保育者及び教員・社会福祉の現場で活躍する人材育成を目標とした大学であることから、教員が全面的に指導をするのではなく、2年生の中から「学生スタッフ」の希望者を募り、自らが企画をして1年生にレクリエーション(仲間作りゲーム・ダンス)やキャンプファイアーを指導する方法を取っている。昨年度までは「学生ボランティア」と称し、比較的責任感がなく1年生と一緒に楽しんでいるという学生が多かったことから、本年度より「学生スタッフ」と名称を変更し、学生スタッフ自身が責任を持って教職員のサポート役として活動できるようにした。1団の研修には60～80名の新入生が参加し、参加人数に応じて6～8名の学生スタッフが引率している。



写真1. ハイキング

2. 研究方法

2-1. 調査対象者と調査時期

本調査は、東京福祉大学社会福祉学部保育児童学科(池袋キャンパス)1年生111名を対象に、プログラム最終日(平成22年7月24日及び28日)に実施した。アンケート回収率は100%である。

2-2. 調査方法

質問紙調査法(記述式・複数回答可)

2-3. 質問項目

- Q1. 研修に参加して楽しかったこと
- Q2. 研修に参加してつらかったこと
- Q3. 今後やってみたい野外活動
- Q4. 研修の満足度



写真2. アンケート記入の様子

3. 結果

Q1. 研修に参加して楽しかったこと

1. キャンプファイアー (44%)
2. 部屋での自由時間 (22%)
3. レクリエーション活動 (15%)
4. ハイキング (7%)
5. 全ての活動 (6%)
6. 先輩や友人との交流 (5%)
7. なし (1%)

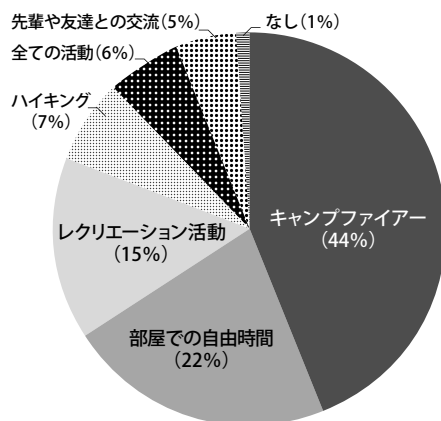


図1. 研修に参加して楽しかったこと



写真3. キャンプファイアー

Q2. 研修に参加してつらかったこと

1. ハイキング (37%)
2. 早起き (16%)
3. 風呂 (8%)
4. 雨 (8%)
5. なし (7%)
6. 食事 (6%)
7. 虫 (6%)
8. 人間関係 (6%)
9. その他 (6%)

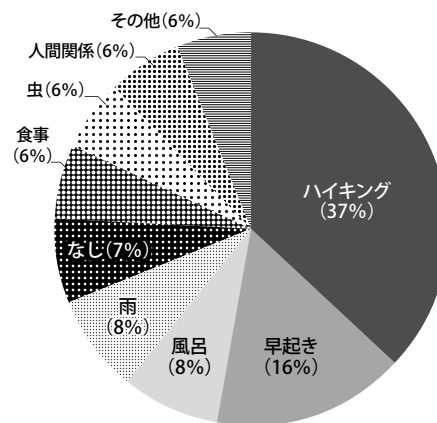


図2. 研修に参加してつらかったこと

Q3. 今後やってみたい野外活動

1. 野外炊事 (39%)
2. 花火 (15%)
3. 球技大会 (12%)
4. 海川遊び (8%)
5. 雪遊び (6%)
6. キャンプファイアー (6%)
7. 山登り (4%)
8. なし (3%)
9. その他 (7%)

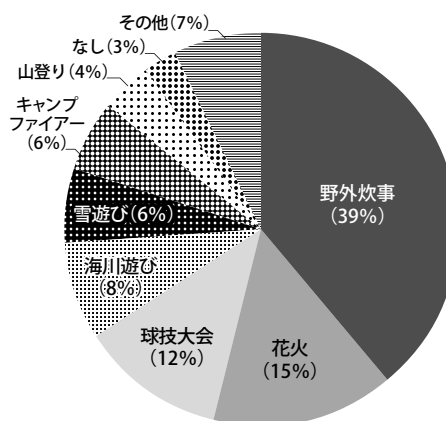


図3. 今後やってみたい野外活動

Q4. 研修の満足度

1. 満足 (87%)
2. やや満足 (7%)
3. 普通 (4%)
4. やや不満 (2%)
5. 不満 (0%)

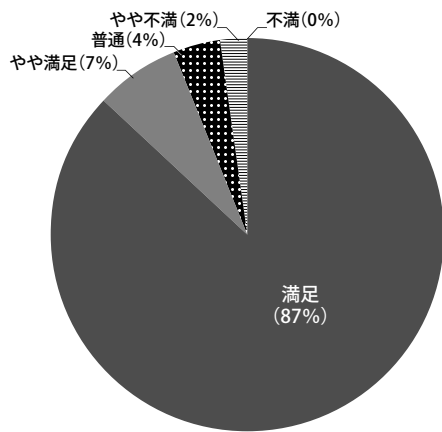


図4. 研修の満足度

4. 考察

1) 楽しかった活動では「キャンプファイアー」が最も多く挙げられており、野外でのレクリエーション活動も学生達にとって楽しい思い出となっていることがわかる。また、男性は10人部屋、女性は6～8人部屋であったため、普段コミュニケーションを取ることがない学生とも寝泊りをともにすることで、より親密な交流が図れたようである。雨天のためキャンプファイアーができなかった団では、「野外でキャンプファイアーをやりたいかった」という回答があった。

2) つらかった活動では、37%の学生が「ハイキング」と回答している。池袋キャンパスには運動ができる環境がないことから、日頃の運動活動量が少なく学生の体力も低下傾向にあるため、「ハイキングがよかった」と感じた学生が最も多かったのではないかと推察される。また、都会暮らしの学生が多いため、自然の中での活動体験や集団での宿泊経験が少なく、気候の変動や環境の変化に上手く対応できないという回答もあった。

3) 今後やってみたい野外活動では、「野外炊事」が最も多かった。これについては早速、平成23年度よりプログラムに導入し、現在学生の反応について考察中である。また、花火・海川遊び・雪遊びをやってみたいと回答していることから、都会で生活する環境により野外遊びの経験が不足していると考えられる。また、野外活動＝球技大会と捉えた学生が多いことに、自然を満喫する遊び体験の乏しさが垣間見える。

4) 赤城山宿泊研修の満足度は、「満足」と「や

や満足」を合計すると94%の学生が概ね満足したと回答している。本研修の集団での宿泊研修の2つの目的(表1)が達成でき、大変充実した活動であったと推察される。

5. まとめ

社会福祉学部保育児童学科(池袋キャンパス)の実態調査から、今日の『大学教育にとって、野外活動は大変重要で意義深い経験である。』ということがわかる。

しかし、今後、更に充実した内容にするためには、野外活動プログラムの見直しが必要である。これまでの宿泊研修は、教職員や学生スタッフが「やってくれる」という、新入生からすれば受け身の活動であったが、今後は保育者及び教育者として必要な知識・技能を取得できる「野外炊事」や「グループ活動」を取り入れることで、学生自身が自ら考え行動する学習の場としたい。

また、学生スタッフの人選や意識改革、1年生の活躍の場(スタンツ発表等)の充実や早朝の「ラジオ体操」の実施など、具体的に改善できることについてプログラムに取り入れ実施したい。改善後のプログラムを最後に添付しておく。(表3)



写真4. 朝の集い

表3. 平成23年度 池袋キャンパスプログラム

<p>1日目</p> <p>AM 集合／池袋出発／研修センター到着／昼食</p> <p>PM 開校式</p> <p>アカデミックアドバイザーとの集い</p> <p>レクリエーション活動①</p> <p>野外炊事（バーベキュー）</p> <p>グループ活動①</p> <p>（キャンプファイヤーでのスタント練習）</p> <p>入浴／リーダー会議／消灯</p>
<p>2日地目</p> <p>AM 朝の集い（ラジオ体操実施）／朝食／清掃</p> <p>ハイキングへ出発</p> <p>PM 昼食／赤城山研修センター到着</p> <p>グループ活動②</p> <p>（キャンプファイヤーでのスタント練習）</p> <p>夕食</p> <p>キャンプファイヤー</p> <p>入浴／リーダー会議／消灯</p>
<p>3日目</p> <p>AM 朝の集い／朝食／清掃</p> <p>手紙書き</p> <p>レクリエーション活動②</p> <p>昼食</p> <p>PM 閉校式／研修センター出発／池袋到着／解散</p>

カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状

川口 博行（山口県キャンプ協会副会長）

hiroyuki KAWAGUCHI

1 はじめに

私は平成21年から23年3月の2年間にわたって、国際協力機構（JICA）の海外シニア・ボランティアとしてカンボジア教育・青年スポーツ省に派遣され、ナショナル・ユース・キャンプなどの青少年育成事業に携わってきた。ここでは、カンボジアの青少年養育の現状と青少年交流事業の取り組みを報告する。

2 カンボジアの概況

カンボジアは、インドシナ半島の中央やや南西側に位置し、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接した王国である。その総面積は、約18万平方キロ（日本のほぼ半分）、総人口は、約1,309万人（日本のおおよそ1割程度）、国民の9割をクメール人（カンボジア人）がしめており、残り1割を20あまりの民族がしめている。また、国民の約8割が農業に従事しているという典型的な農業国



写真1 プノンペン市中心部の独立記念塔

である。

地形的には、隣接国との国境に沿って山脈が走っており、その周辺には原生林が残されている。また、タイ国境に近い海岸線には、豊富なマングローブの原生林が残されている。

国の最も中心的な産業である農業を支えているのは、中央平原の東よりを流れるメコン川と中央平原の西よりにあるトンレサップ湖であるが、このトンレサップ湖は、雨季には乾季の3倍にもふくれあがるという特徴を持っており、この地域に特徴的な浸水林、湿地、湖沼を形成している。

カンボジアと聞くと内戦終了後間もない国で、未だに各地に地雷が残されており、学校もなく、多くの子どもたちが字も読めず、貧しい暮らしをしているというイメージを抱く人が多いことだ

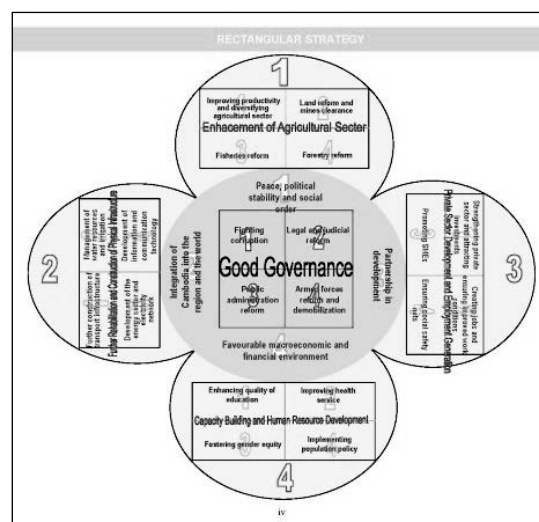


図1 四辺形戦略概念図

ろう。事実、カンボジアでは、1953年フランスから独立して以後、1970年にクーデターが起こり、その後、内戦と混乱が続いた。特にポル・ポト時代（1975～1978年）には、原始共産制が実施され、プノンペンなどの大都市住民、資本家、技術者、知識人などの知識階級は財産・身分を剥奪された。彼らは、農村に強制移住させられ、農業に従事させられただけでなく、反乱を起こす可能性があるとして、海外から帰国した留学生や資本家を含めて、多くの人たちが虐殺された歴史がある。

その後、1992年からの国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）による暫定統治、1993年の政権議会選挙、新憲法公布、そして1998年および2003年の総選挙によって現カンボジア政府が確立したのである。

現政権下では「四辺形戦略」と銘打った国家戦略のもとに安定した政権運営が行われており、経済的にも比較的堅調な成長をしてきている。（図1）

IMFのデータ（World Economic Outlook: 2011年4月版）では、GDPの年間成長率は、2005年に13.25%、2006年は10.77%、2007年は10.21%となっており、2009年には世界不況のもとで▲1.96%と減少したものの、2011年には6.48%が見込まれており、東南アジアの中でも高い成長率を達成している国の一つになっている。

また、カンボジア教育・青年スポーツ省発表の教育統計によると2010～2011年の統計で、就学率は小学校94.6%、中学校37.2%、高等学校20.5%となっており、ユニセフの調査によると識字率は、15歳以上の男子85%、女子64%となっている。

学校に行っていない理由も「家事家の手伝いで学校に行けない」が、男子23.9%、女子28.8%で最も多く、ついで「学校に行きたくない」男子26.0%、女子22.5%、「学校が面白くない」男子6.6%、女子6.2%、「授業についていけない」男子6.1%、女子6.0%、「お金がないから」男子0.6%、女子0.8%となっており、最大の問題は若年労働にあるという指摘がされている。

3 カンボジア教育・青年スポーツ省青少年総局の施策

カンボジア教育・青年スポーツ省は、現在6局26部局と24州教育省で組織されており、2015年の完成を目指して部局の再編が行われている最中である。私が所属していた青少年総局は、2007年に青少年部局とユース・センター部局の2部局に分割されている。

青少年総局の施策の中核をなしているのが、3 Good Movementと呼ばれる施策で、「Good Child, Good Student and Good Friend」をスロー

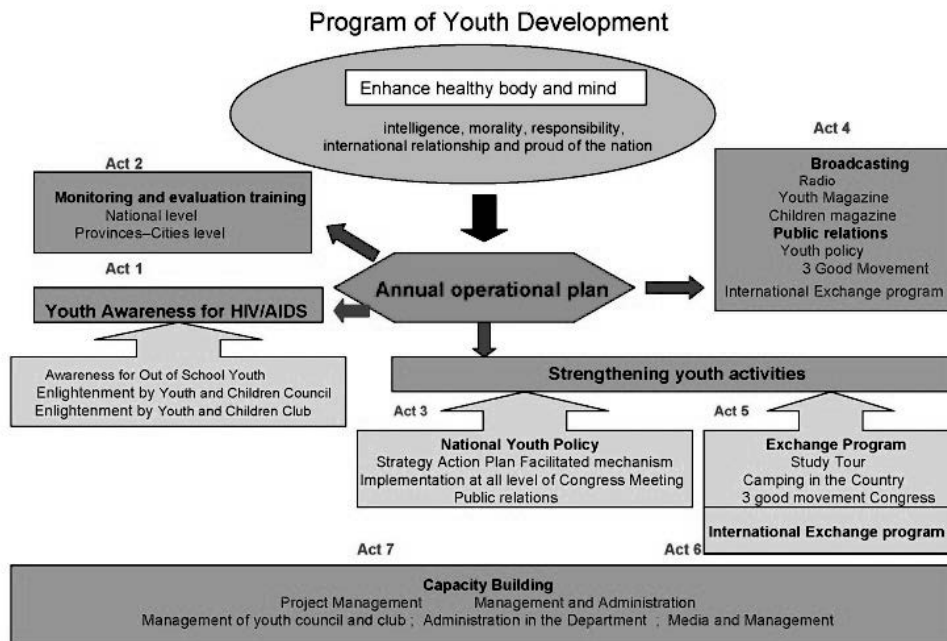


図2 青少年総局施策図

ガンに青少年の健全育成を目指したものである。

青少年総局の事業は、①青少年対象の HIV/AIDS 対策啓発事業、②調査能力と事業評価能力の向上に関する事業、③ナショナル・ユース・ポリシー策定とその関連事業、④報道機関を活用した教育番組制作事業、⑤青少年交流事業、⑥青少年国際交流事業、⑦職員の資質向上事業の 7 事業からなっているが、ここでは、その中で青少年交流事業として実施されているスタディ・ツアーとナショナル・ユース・キャンプについて報告する。

4 スタディ・ツアーとサマー・ユース・キャンプ

スタディ・ツアーは、小学生対象、中学生対象、高校生対象、学校に通っていない生徒対象として年 4 回が予定されているのだが、私がカンボジアに派遣されていた 2 年間は、予算不足のために学校に通っていない生徒対象のコースは開催されず、年 3 回実施されたのみであった。このスタディ・ツアーは、日本で言うならば修学旅行にあたるものと言えるが、実施主体が学校ではなく国の機関である教育・青年スポーツ省であることが重要である。参加者は 200 人。3 Good Movement で顕著な実績があった者として学校から推薦された者を州教育省が選抜して決定されている。

通常 4 泊 5 日の日程で実施されているのだが、最初の日、各地からシェムリアップにあるナショナル・ユース・センターに集まり、受付をすただけで終わってしまう。というのもカンボジアでは、乗り合いバスが主な輸送手段なので最も遠いケップ州からシェムリアップまでは 10 時間以



写真 2 アンコール・ワットでの記念写真

上かかってしまうからである。

翌朝は、班別に分かれて自己紹介をした後、役割を決める。午後は、アンコール遺跡群を管理しているアプサラ機構から派遣された学芸員の「カンボジアの歴史とアンコール・ワット遺跡群」といった内容の講義がある。

次の日から遺跡見学が始まるのだが、6～7 台のマイクロバスが隊列を作り、その前後に白バイが配置されて誘導されながら動く様子は壮観である。

バンティア・スレイ、タップローム、バイヨン、バコン、ネアック・ポアン、プレアカン遺跡等々、その都度見学場所は、変わるのだが、この日に 2～3 の遺跡を見学し、翌日がアンコール・ワット見学という順序は、変えられることはなかった。

夜のプログラムとしては、ユース・センターに付属したカンボジア芸術学校を訪問して生徒たちが踊るアプサラ・ダンスや各地方の踊りなどを見学することが定番となっていた。

その他のプログラムとして国立博物館の見学やカンボジア芸術村見学が入れられたり、各州参加者の特技披露といったお楽しみプログラムが入ったこともあったが、あくまで、このスタディ・ツアーが目指すところは、「カンボジアの歴史を学び、アンコール・ワット遺跡群を見学することによってカンボジア国民としての誇りを高めるとともに集団生活の中で仲間意識を高めること。」である。

このスタディ・ツアーでは、宿泊はゲストハウスと呼ばれる旅館に州ごとに分かれて泊まるのだが、食事はユース・センターに仮設の炊事場が準備され、業者がやってきて 200 人分の食事を 3 食作っている。当初、特別に指示をしなくても丸いテーブルに 10 人ずつが座り、整然と食事する風景に驚いたのだが、実はカンボジアでは、このように多数の人が一緒に食事することは日常茶飯事で、毎月の法事、葬儀、結婚式などがあるたびに、道路や庭に食事用の大型テントが立てられ、折り畳みの丸テーブルと椅子がセットされ、10 人が座ったテーブルから食事が運ばれて、食事が終わったグループから引き上げていき、次のグループが席に着くことが習慣になっているのである。そのためテント、テーブル、椅子、炊事用具



写真3 スタディ・ツアー食堂テント

をトラックに積んで、何処にでも出張して、野外で料理を作り食事を提供する専門の業者が存在するのである。

また、2010年には、教育省の新しい試みとして海外に居住するカンボジア人の青年たちを対象にしたサマー・ユース・キャンプが企画された。

インターネットを通じて世界中のカンボジア人に参加を呼びかける画期的、斬新な事業だったのであるが、申込者が少なくして危うく中止の憂き目を見るところだった。

しかし、急遽、対象をカンボジア国内の大学生にも拡大して実施されることになり、その運営を青少年総局が行うことになった。1ヶ月足らずの期間にカンボジア国内にある50近くの大学に参加者を募って、大学生300人が集められた。郵便システムの発達していないカンボジアでは、前年までは、公文書を各州に配るためには、定期便のバスや乗り合いタクシーの運転手に封筒を預けて、州の中心都市まで運んで貰い、その場まで職員が受け取りに行くのが当たり前だった。そのため、一つの文書が処理されるためには、配布に1週間、回答が出来るのに数週間、それが青少年局に届くの更に1週間というのが常識であり、わずか1ヶ月でカンボジア全州から参加者300人の名簿が出揃い、大会準備が出来たことは、称賛に値することだった。このスピード処理には、コンピュータとインターネットが大きく貢献していたのである。

この時点では、各州教育省にコンピュータが設置され、インターネットによって繋がれていたわけではなかった。そのため各大学への募集要項は大学に直接メールで届けられ、参加者をまとめる

各州教育省には電話で指示して、インターネットを使える職員をインターネット・カフェまで行かせて、本庁からの書類をUSBメモリにダウンロードして事務所に持ち帰り、参加者のとりまとめをした後、再び職員が、インターネット・カフェから本庁にメールを入れるといった表面には出ない若手の努力があったのである。

しかしこの出来事によってインターネットの重要性が認識されるようになり、その3ヶ月後には、韓国ユネスコ協会の支援によって24州全ての教育省にコンピュータが贈られることになった。更にその後、JICAの支援によって教育省各局の事務所がLANで結ばれ、教育省内のIT化が一気に進められるきっかけとなったのである。

このようにして開催されたサマー・ユース・キャンプもその内容はと言えば、規模を大きくしたスタディ・ツアーのような形態であった。しかし、参加者の中から選ばれた実行委員たちの手によって、全ての行事や討論会の報告が、会議直後、行事終了時には、コンピュータによってまとめられ、動画・スライドをまじえて編集され、その日の夜または翌日には発表されたのである。大学生たちの情熱と熱気に溢れた会場では、新しいカンボジアを創るのだという雰囲気は日に日に高まりを見せていった。最終日の夜、閉会式が始まって間もなく雨が降り出してしまったのだが、会場の若者たちは席を立つものもなく、雨に濡れながら来賓の祝辞を聞いていた。そんな中、スタッフがさしかける傘に入ろうともせず、自らも学生たちと同様にずぶ濡れになりながら「君らにカンボジアの将来がかかっている。」と話す大臣のスピー

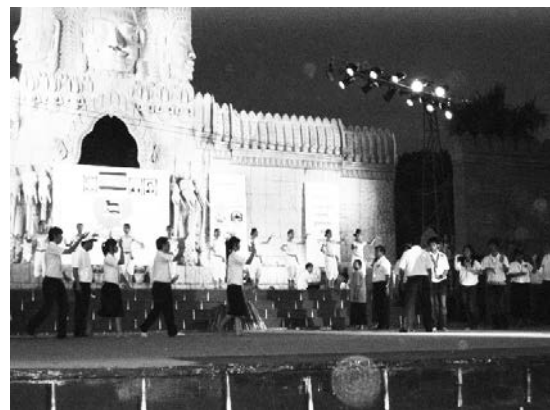


写真4 サマー・ユース・キャンプでの開会式リハーサル

ちに、大学生たちは拍手と歓声で答えるという感動的場面となったのである。

5 ナショナル・ユース・キャンプ

次に5泊6日の日程で毎年1回開催されているナショナル・ユース・キャンプについてであるが、2009年度はベトナム国境に近いモンドルキリ州で開催され、2010年度はタイ湾に面したケップ州で実施された。ケップ州は、フランス統治時代には、海岸リゾートとして有名で別荘や保養所などが整備されていたようであるが、内戦でことごとく施設は破壊され、廃墟状態になっていたのだという。だが、近年になって、外国人観光客をターゲットにした別荘風の建物が多く造られ、エコ・リゾート地として観光開発が進められている地域の一つとなっている。



写真5 モンドルキリでのキャンプ・サイト

写真5は、2009年のモンドルキリでのナショナル・ユース・キャンプのキャンプ・サイトとなった高等学校と教員養成校に隣接したグランドの様子である。夜までに各参加者が集まり指定されたテントで1泊したのち、翌朝は日の出前にグランドに集合し、日の出に合わせて国旗を掲揚し、軽い体操やゲームが行われた。このときに国旗と一緒に掲揚されたユース・カウンシル旗は、キャンプ期間中ずっと掲げられ、閉会式で降納され、次期開催州に伝達されるシステムになっている。このモンドルキリ州は、ゴム、コショウ、カシューナッツのプランテーションが盛んな地域で、森林の多くが外国資本によって買収されているのだと言うのだが、現在は、その多くが自然保護林に指



写真6 家畜運搬用トラックでの移動

定されて、樹木の伐採が禁止されている。

しかし、プランテーション開発をもくろんで土地を入手していた外国企業は、カンボジア政府が一方的に森林開発を禁止し、プランテーションを新たに造成することが出来なくなったため、森林への立ち入りを禁止し、観光客からは通行料をとるところも珍しくないようである。だが、エリア内のインフラ整備に力を入れておらず、雨季には車がぬかるんで通れない状況になる場所も多い。カンボジアで最も美しいと言われる滝を持つ地域には、州知事が訪れ、通行料をとるからには、道路整備をするように依頼しているのだという。我々は雨季が終わってモンドルキリを訪れたために道路がぬかるんで通れないというところはなかったのだが、子どもたちを乗せた家畜運搬用の大型トラックが小川を渡るときには、運転助手がトラックを降り、橋代わりにかけられている束ねられた丸太にトラックのタイヤが乗っているかを確認しながら誘導するというまるでサファリラリーを思わせるような経験を繰り返したのである。滝に向かう途中には、少数民族の暮らす集落があり、更にその奥は、湿地と巨木に囲まれた自然保護林地帯であったのだが、湿地に集まっている野鳥の群は、まるで映画の世界を見ているようだった。滝が近づいて来たところでトラックを降りられて、残り数百メートルは歩いていくのだということで、いったん林の中で子どもたちの健康状況を確認しようということになり、全体の写真が撮れるようにと少し離れた位置に移動しようとしたとたん、林の中から1頭のゾウが出てきたのには驚いた。落ち着いて見るとゾウの上には一人の現地人が乗っており、まるで馬を操るかのよ



写真7 ケップ州でのキャンプ・サイト

うに林の中を移動している。青少年局の職員が、ゾウに驚いた私を見て笑いながら、「この地域では森林作業に未だにゾウを使っているのだ。」と説明してくれた。

2010年のナショナル・ユース・キャンプは、ケップ州で開催された。この年のキャンプ・サイトは、陸上競技場のようなところだったのだが、ここでのメイン・プログラムは、地元のボーイスカウト、青少年赤十字団、警察、州職員と一緒に行った海岸清掃キャンペーンと海岸線近くの山に整備されたハイキング・コースを歩くハイキングであった。

これらのナショナル・ユース・キャンプの参加者は、中高生 300 人。スタディ・ツアー同様に各学校から推薦された 3 Good Movement で顕著な実績を示した生徒たちである。このナショナル・ユース・キャンプが、スタディ・ツアーと違うのは、テント泊だということであるが、食事は、スタディ・ツアー同様に、業者が設置した食堂用テントで食べる。局長によると、「以前は、参加者がグループごとに食事を作ったこともある。」



写真8 ケップ州でのキャンプ・ファイアー

と言うが、効率と予算との絡みもあって、結局は現在のようなシステムになっているのだということである。

また、ナショナル・ユース・キャンプのプログラムには、開催州の意向が大きく影響し、開催州の知事から「こんなところも見て欲しい。」「ここではこんな体験が出来る。」と様々な要望があるとそれを取り入れざるを得ないのだという。そのため必然的に名所旧跡の見学、地元主導の行事にキャンプ参加者が合流するといったプログラムがメインになってしまう。しかし、夜のプログラムは、参加者が主体的に参加できるようにという配慮で、会場にステージが設置され、プロのバンドを雇ってカラオケ大会をしたり、ダンス・パーティが行われたりする。各州代表によるダンス・コンテストが行われたこともあった。キャンプ・ファイアーは、最終日の夜に行われ、火の効果を活かした演出で終了式が行われる。

6 今後の青少年活動への期待

このように現在カンボジア教育・青年スポーツ省が実施しているプログラムの多くは、カンボジア国内の青少年の交歓大会的要素が強く、本来、目指している将来のカンボジアを担う青少年リーダーの育成という観点からは、更に効果的なプログラムが導入されることが望まれる。

しかし、UNDP、各国政府機関、国際 NGO 等の主催事業に国際交流事業として、カンボジアから数名～数十名の青少年が派遣されており、韓国、日本、中国、および ASEAN 諸国で異文化理解、人間理解、環境理解、国際平和等に関する様々な先進的なプログラムを経験してきている。また、それらの事業に引率者として派遣された青少年局の若手スタッフも、海外諸国とのプログラムの質的違いや指導者の指導力の違いを感じて様々な努力を重ねてきている。更には、ここ数年、国際交流プログラムを体験した大学生を中心にカンボジア人の手による国民の生活改善や文盲解消のためのボランティア活動が芽生えつつある。今後は、海外支援に依存するのではなく、自分たちの手で自国を支えようという意欲的な若者たちのボランティア活動を支援していくことが重要だと考える。

実践報告

ホール イン ザ ウォール キャンプ
Hole in the Wall Camps

～病児キャンプの世界的ネットワーク～

テリー・ディグナン (ホール・イン・ザ・ウォールキャンプ協会コンサルタント)

Terry Dignan

1. 歴史

2008年に83歳で亡くなったポール・ニューマンは、アメリカを代表する俳優の一人だが、非常に謙虚で、人道的な意識の高い人物であった。彼は自分自身を「大変に幸運な普通の人」だと考え、その成功は自分だけが享受すべきものでなく、他者を助けるために用いて、世界をよりよい場所に変えていくためのチャンスだととらえた。

1982年、彼は「Newman's Own」という食品会社を立ち上げた。手作りのドレッシングが友人に好評だったからという軽い理由で始めた会社だったが、彼の信念に沿って、会社と同時に「Newman's Own 財団」も立ち上げている。「Newman's Own」のすべての税引き後利益はこの財団に託され、世界中の慈善事業のため寄付された。これ自体大変なことで、財団の寄付総額は30年間で300億ドルを超えているのだが、会社の成長につれて、彼は「これは何か特別にユニークなことをするチャンスだ」と考えるようになったのだ。

基金の活動を通して、彼は重い病気の子どもを持つ家族からの助けを求める何通もの手紙を受け取っていた。これらの手紙が、「そこへ行くことが生きてゆく心の支えになる場所」と彼が表現するHole in the Wall Campsにつながるのである。このキャンプを作った理由を答えるとき、彼は彼の信念の基本となっている「幸運」について語っている。その幸運には、俳優としての成功だけでなく、若い戦士として参加した第二次世界大戦での経験も含まれている。「私の人生には多くの幸

運がありましたが、そうではない人もいます。特に心が痛むのは、幸運に恵まれない子どもたちがいることです。私の幸運は、その状況を変えるためにあるのだと考えています」。そして、子どもたちのためにできるとびきりユニークな方法を彼は考え出した。それが、重い病気の子どもたちのためのキャンプである。

1988年、ポール・ニューマンはHole in the Wall Gang Campをコネチカット州、アッシュフォードに開設した。この名前は、彼の代表作のひとつである『明日に向かって撃て! (Butch Cassidy and the Sundance Kid)』に出てくるギャング団に由来する。そこでは、すべての活動がどんな子どもでもできるように整えられており、子どもたちは「病気の子ども」ではなく、ただ単に「子ども」として扱われる。彼は、このキャンプが子どもたちが病気のことや治療の苦しさを忘れることのできる避難場所、普段の生活でさまざまな制限を受けている子どもたちが“普通の”経験ができる環境であり、すばらしい癒しの場所になると考えた。

Hole in the Wall Gang Campは、初年度に288人の子どもを迎え入れたが、今では毎年6月から8月の間に1,000人以上の子どもを迎え、ほかの季節にも多くの子どもたちがやってきている。しかし、これはほんの始まりに過ぎず、ネットワークは急速に広がって、現在、5つの大陸にある11のキャンプで、これまでに30万人を超える子どもたちを無料で招待してきた。



写真1 Hole in the Wall Camps 協会に所属する 11 のキャンプ。

2. ケアの基本理念とプログラムデザイン

Hole in the Wall Camps について説明をするとき、まずあげられるのは、このキャンプの使命に基づいて決められた、ケアや医療環境の整備、スタッフの選択とトレーニング等についての基本原則をすべてのキャンプが順守しているということである。その原則の下で、重い病気の子どもやその兄弟のためのサマーキャンプ、病気で子どもを失った家族のためのプログラム、年間を通じた家族や支援グループ、医療専門職のためのプログラムなど、さまざまな活動を行っている。

ポール・ニューマンは、重い病気が子どもたちに及ぼす心理的影響、そしてその結果としての社会的影響の大きさを認識していた。命に危険を及ぼすような重い病気は、子どもたちにその病気とつきあうためのさまざまな調整を強いる。特に、ほかのひととの人間関係や自己の認知において、その影響は顕著に現れ、普通、日常生活の中で自然と培われる、毎日の決まりごとをこなすことや、個人のプライバシーの感覚、家族や友人との関係といったことが身につかず、生きる力を十分に身につけることが難しくなってしまうのである。

また病気そのものやその治療の影響で、髪の毛が抜けるとか、体重が増減する、手術跡が残ると

いうふうに、その子の見た目に変化を生じさせることがある。こうした変化は、「自分はほかの子とは違う」とか、「自分は魅力的ではない」と思わせてしまう理由になる。これは重要なことである。なぜなら子どもたちにとって、身体的な見た目と社会的に受け入れられること、特に友だちに受け入れられることは深くつながっているため、見た目に関するマイナスの自己認知は、直接的に自尊心、信頼感の喪失につながる。自尊心と信頼感の欠如は、退行的な行動をとったり、仲間に入ることの恐れから学校に行けなくなったりして、結果として社会的、感情的な成長の遅れを生じさせる原因になり得るからだ。

そこで、Hole in the Wall Camps は「気晴らし、リフレッシュとしての活動」というコンセプトを前提としている。活動の多くは、子どもたちの重い病気や障害による心理的影響を取り除いたり、小さくしたりすること、それによって自尊心や自律性を回復させることを目的としている。そのため、すべてのキャンプで、レクリエーション・セラピーや冒険を基礎とするカウンセリング (Adventure-Based Counseling)、作業療法、心理学、教育学といった理論的な枠組みに基づいてプログラムを組み立てている。

Hole in the Wall Camps が焦点を当てているの

は、よりよい自己イメージを持つこと、仲間や家族との関係の改善といったことである。ていねいに、注意深く計画され、運営されるグループ活動や芸術、音楽、ドラマ、冒険プログラムなどに参加することを通じて、病気の影響を受けている子どもに力をつけることと、自分で思っている以上のことができると思ってもらうことを支援する。それによって、自律性を高め、信頼感と自尊心を強くするのである。このこと自体は、北米を中心に多くのセラピューティック・キャンプ・プログラムが広く実施されており、特別なものではない。しかし、Hole in the Wall Camps では、この考え方を世界的な文脈で発展させ、実際に運用しているところに特徴がある。このことは、セラピューティック・レクリエーションを基礎とした、ユニークなチャイルド・センタード（Child-Centered / 子どもを中心に据えた）のプログラムが、子どもたちの人生に深くよい影響を与え、彼らのリハビリテーションに役立つことを広く知らしめることにつながると考えている。

少し整理してみると、重い病気の子どものことやその家族へのプログラムを考える場合、私たちは以下の点に注目している。

1. 病気そのものの心理的影響
2. 病気とその治療による身体的な変化
3. 自己イメージと自己認識の変容
4. 親や兄弟に対する影響とその対処能力

こうした影響、変化に対応するプログラムの目的を達成するためにまず必要なのは、身体的、精神的に安全な環境を作ることである。その環境においては、子どもたちは理解され、受け入れられ、彼らの重い病気の経験は可能な限り当たり前のこととして受け止められる。こうした環境作りに必要な要素はいくつもあるが、中でも重要なのが以下に示すことからである。

1. 物理的統合：参加可能な物理的アクセスの権利が認められ、保証されること。
2. 機能的統合：物理的な環境が整備されるだけでなく、スタッフが活動を適切に行う知識と資源を持っていること。
3. 社会的統合：子どもたちが社会的に受け入れられること。また、キャンプのすべての

場面において、仲間との自発的交流に参加ができること。

これらのことがらに配慮して注意深くデザインされ、運営される冒険や芸術、音楽、ドラマなどのプログラムや、個人やグループでの挑戦をともなうプログラムへの参加を通じて、子どもたちは自律性を身につけることができ、自信や自尊心も高められるのである。また、キャンプは全体を通して楽しいものとしてデザインされているが、同時に、子どもたちが肩ひじを張らずに病気やその治療、あるいは治療によって生じる問題について仲間と話すことができる場所でもあるとらえている。そのことによって、子どもたちは自分の病気について理解を深めることができるのである。



写真2 ともに楽しい時間を過ごすことで、病気のことを含むいろいろな話ができる関係が作られる。

3. セラピューティック・レクリエーション

すべての挑戦をともなう活動の基本的なゴールは、子どもが成功体験をすることである。重い病気の子どもの自尊心は、病気によるさまざまな制限に囲まれた状況を感じるために、全体として弱まっている可能性がある。こうした子どもたちが感じている制限に挑戦するように、Hole in the Wall Camps のプログラムはデザインされている。

たとえば、「私はちっとも創造的じゃない」と思っている子どもが、クラフトですばらしい作品を作る。たとえば、歩くことができない子どもが、車いすを降りて、壁登りや木登りをする。あるいは、とても内向的で内気な子どもが、観客の前で歌をうたったり、ダンスをしたりドラマを演

じたりする。このように病気の影響を受けて「私にはできない」と感じてしまっている限界に意図的に挑戦し、それを乗り越えることは、子どもの自尊心を高めることに大いに役立つ。自尊心の回復は、病気の大変さとつきあっていく力も高める。セラピューティック・レクリエーションの活動は、そこでの成功体験を通じて、子どもたちに自分が特別な存在であると感じさせ、マイナスのイメージを最小化することも助けるのである。

Hole in the Wall Campsでは、セラピューティック・レクリエーションを通じて、子どもたちが自分自身の隠された側面を発見し、自分の能力に気づくことのできる機会を模索している。十分なトレーニングを受けたスタッフのチームは、個々の気づきについて話し合いや自分で考える機会を提供したり、肯定することによって、一人ひとりの自己認識のプロセスをサポートする。



図1 セラピューティック・レクリエーションのモデル

Hole in the Wall Campsでは、レクリエーションの活動もさまざまな方法で自己認識と学びを促進することのできる、新しい領域への冒険ととらえている。そのセラピーとしての意味を高めるために、以下のようなことが配慮される。

- ・身体的、感情的に安全な環境が保証されている。
- ・参加への物理的制限、障害が取り除かれている。
- ・十分なスタッフ体制によって、キャンパーの個別性に十分配慮したサポートが行われている。
- ・すべての活動には一定レベルの挑戦の要素が含まれる。

まれる。キャンパーは自分にとって居心地のいい領域を少し超えて、居心地がいいと思えないこともある未知の領域に挑戦するよう働きかけられる。

- ・入念なびきによって、すべての挑戦は成功へと導かれる。未知の領域がより身近な存在、新しい居心地のいい場所の一部になったとき、新しい変化が生まれる。
- ・レクリエーションの内容は、キャンパーの経験を精査しながら、その経験を汎化し生活に応用するという目標と照らし合わせて、キャンパーを含む話し合いを通じて決定される。
- ・個人活動とグループ活動は、個々の成長とグループ内の信頼と協力の両方が達成できるよう、バランスよく提供される。
- ・チャレンジ・バイ・チョイス (Challenge by choice / やるかやらないかの選択はすべて参加者に任されている) は Hole in the Wall Camps のプログラムのごく基本的な考え方である。子どもたちは、どの活動においてもどの程度、どのような形で参加するかを自分で決める。
- ・さまざまな病状、さまざまなバックグラウンドを持つほかの子どもとの交流は、孤独の感覚を和らげ、共感や寛容の感覚を育てる。

活動が行われる社会的環境もまた同様に重要である。同じような重い病気の経験をしているほかの子どもとの交流によって、子どもたちは勇気や強さを共有することができる。また、共通の経験を経て気持ちを理解してくれる人と感情的なつながりを持つことで、自分自身の病気についての展望を得ることができる。多くの子どもたちにとって、キャンプは家族や友だちと話すにはつらすぎる話題を語り合える、現実社会での最初の場所となるのである。

こうしたつながりを促進するため、キャンプでは毎夕、ふりかえりの時間を持っている。子どもたちはその日一日のことから、徐々に自分の望み、夢、恐れなどについても語り始める。この時間は堅苦しいものではないが、キャンプカウンセラーによって注意深く運営されており、子どもたちは自分の意見や感情は評価され、尊重されるものであることを知る。また、国際的、文化的多様

性もまた、子どもたちの展望を広げることに役立つ。文化的背景や病状、年齢など、みんなが「違う」場においては、違いのあることが普通であり、逆に「みんなが同じ」であることが普通とは言えないことに気づく。こうしたことによって、子どもたちは自分が孤独な存在ではないということに気づくのである。

セラピューティック・レクリエーションは、それが娯楽的なものであるからこそ効果的なのである。子どもたちは活動を楽しみ、新しい活動に参加することを切望する。挑戦し、困難に立ち向か



写真3 自分ではできないと思っているようなことにも挑戦する。その場合も、やるかどうかの判断はキャンパーにゆだねられる。

い、冒険をして、新しいことをやってみる。一人ひとりのこうした姿勢が、プログラムのセラピーとしての効果を高める。子どもたちは楽しみながら、よい自己イメージを築き、自尊心を高め、自信や寛容さ、理解し協力し合う力を身につける。

4. キャンプを支える要素

4.1 キャンパー～私たちのキャンプの中心にあるもの

すべての Hole in the Wall Camps は、それぞれに異なるキャンパー募集規定と手順を持っている。共通したルールとしてあるのは、そのキャンプで医療的に対応できる病気、病状の子どもを受け入れるということだけである。

キャンパーは、パートナー病院のネットワークを通じて募集される。各病院には参加可能な人数が提示され、病院はそれに応じて参加申し込みをする。病院にはそのキャンプの参加基準もあわせて示されるので、その基準に基づいて候補者が選ばれる。

各キャンプは申込書を受け取ると、参加基準に照らし合わせて参加可能かどうかを確認するとともに、そのほかにキャンプの参加に影響することがらがないかを確認する。こうした二段階のチェックを経て参加が決定し、最終意思確認を行う手紙がそれぞれに送られる。その後、インタビューカードのやりとりや電話での相談を行うが、こういったやりとりは必要に応じて、子どもがキャンプに到着するまで続けられる。



写真4 通常であれば参加することは考えられない子どもたちにも、キャンプを楽しむ機会が提供される。

4.2 医療体制

多くある病児を対象としたキャンプの中でも、Hole in the Wall Campsの特徴と言えるのは、キャンプ場に完全な医療体制を設けていることである。すべてのキャンプには、さまざまな医療的な状況に対応できる医療チームが設けられており、20年以上を経て、今では50以上の異なる状況に対応できるようになっている。

すべてのキャンプには小児医療に対応した医療センターがあり、手術室、診察室、薬局、ナースステーションが備えられている。この医療センターでは、すり傷や虫さされ、腹痛、風邪といったものから化学療法まで、キャンプ中に必要なあらゆる医療的ケアを提供する。

ちょっとした病院には負けないくらいの体制が整えられているが、すべての医療サポートはあまり目立たないように配慮されている。医療スタッフはジーンズにポロシャツといった姿だし、医療センターで見かけるのと同じくらい頻繁に、カーに乗っている姿やロープスコースにいる姿を見かける。このように、子どもたちが医療を意識しないで済むように配慮されているのだが、高品質の医療センターがあって、プロの医療ケアがその場で受けることができるという条件がそろわなければ、多くの子どもたちはキャンプに参加することができないのである。



写真5 米ノースカロライナ州のVictory Junctionにある医療センター。カーレースの整備場を模した外観だが、内部には十分な医療設備が整えられている。

4.3 スタッフ・トレーニング

Hole in the Wall Campsのトレーニング・プロ

グラムのゴールは、スタッフがキャンパーの人生により影響を与える存在になる能力を身につけ、組織の使命を履行し、目標の実現に貢献できるようになることである。個々のキャンプにとってのゴールは、現在の「最高の実践」を継続し、さらによりよい「最高」を目指す個別のトレーニングを実施することである。「最高」というのは常に移動する目標であり、その言葉が示すものは常に変わる。しかし、きちんとした評価を行うことで、次の「最高」がどんなものであるかという共通認識を持つことができる。

その実現のために、Hole in the Wall Camps協会は、それぞれのキャンプに、夏のキャンプスタッフに向けた以下の内容を含む一定時間以上のトレーニングの実施と、厳密なアセスメントを要求している。

- ・多様性と文化的認識
- ・キャンパーが直面する社会心理的問題
- ・特定のニーズのある子どもに対する適切なケア
- ・包括性 (inclusiveness) と適合 (adaptation)
- ・キャンプ後のキャンパーとのコミュニケーションと関係
- ・現場における尊厳
- ・ボランティアとの協働 など

4.4 ボランティア～代えがたいリソース

ボランティアは、世界中のHole in the Wall Campsにとって不可欠なものであり、最も重要なリソースのひとつである。実際、ボランティアはスタッフの50%以上を占めており、彼らの力なしでは運営することはできない。世界中のボランティアたちは、豊かな知識と経験を私たちのキャンプに提供している。彼らのかかわりと熱心さ、エネルギーはHole in the Wallの成功物語には欠かせない要素である。

Hole in the Wall Campsでは、すべての世代、あらゆる分野のボランティアを世界中から受け入れている。毎年、11,000人を超える18歳以上のボランティアが、彼らの経験、専門知識、そして巨大な創造的エネルギーをキャンパーの人生を変えるために注いでくれている。ボランティアとしての仕事にはさまざまなものがある。それは、キャンプカウンセラーやプログラム指導者、協会

運営のサポートやコンサートやマラソンといった資金集めのイベントでのお手伝いまで幅広いものである。そしてボランティアの多くは、キャンプでのボランティア活動を終えた後も、長期にわたって、本当にさまざまな方法で、全力でキャンパーのためにかかわってくれている。

ボランティアは注意深く選抜され、十分なトレーニングを受ける。それは、キャンプを子どもたちにとって人生を変える経験にするために、そして、キャンプに貴重な時間を提供しようと申し出てくれたボランティア自身にとっても人生を変える経験にするために必要なことなのである。

2011年は、欧州連合が定めたヨーロッパ・ボランティア年だった。ヨーロッパにあるHole in the Wall Campsも私たちのボランティアを評価し、より多くのボランティアの機会を促進するとともに、そのアイデアを世界中のHole in the Wall Campsと共有することを目的にお祝いをした。



写真6 多数のボランティアの働きなしにキャンプを行うことはできない。

5. 究極のスタンダードを作る

Hole in the Wall Campsは、命にかかわる重い病気の子どものための医療環境の整ったキャンプの分野での世界のリーダーであり、よりよいキャンプを作ることが私たちの責任であると考えている。それゆえ私たちは、キャンプにおける医療水準を向上させ続けているし、目的に沿ったプログラム設計とセラピューティック・レクリエーションモデルの実践を通じて、居心地がよく、安全安心で、そしてなにより楽しい環境を作り上げ

ている。さらに、各キャンプがHole in the Wall Campsの名前を掲げるにふさわしい実績を上げているかもチェックしている。このチェックに用いられる基準は、アメリカキャンプ協会のキャンプ認定基準、あるいはそれに準ずる認定基準に協会独自の項目を加えたものである。この基準はHole in the Wall Campsの初期段階から、さまざまなキャンプに関連する認定基準や既存の団体のトレーニング資料などを参考に、キャンプスタッフの絶え間ない努力によって作られた。

Hole in the Wall Campsの活動は成長を続けているので、キャンプが重い病気の子どもの家族にとって、力を与え、元気づける、安全で安心な環境だと明らかにすることが今まで以上に重要になっている。そのため、私たちのような国際的な組織において、常に最高を求め続けることでリスクを減らすという文化を育てることは、どうしても必要なのである。

同時に、「最高を求める」という考え方は、さまざまな意味でインパクトを持ち得る。協会にとっては、「究極のスタンダード」の世界的ネットワークを作る鍵となるビジョンを提示することができる。一方、個々のキャンプにとっては、そのことが学びの環境を整えることになるし、より創造性を発揮し、さらにそこで作り上げたものを他のキャンプと共有しようという意思を強めることになる。

このような背景をもって協会としての基準は作られており、アメリカキャンプ協会の認定基準に示されたような一般的なキャンプが備えるべき項目を備えた上で、協会として独自に、Hole in the Wall Campsが重い病気の子どもの家族に人生が変わるようなすばらしい経験を提供するために必要な要素についても確認するようにデザインしている。それは、協会の基本理念に基づいてプログラムや医療体制、設備等の質を評価するもので、Hole in the Wall Campsの品質を保証するものである。

各キャンプは、3年ごとにキャンプと医療の専門家チームのチェックを受けるし、それ以外の年には自己評価を行う。すべてのキャンプは、Hole in the Wall Campsのメンバーとしてこの基準に合格しなければならない。そして基準はキャンプから



写真7 キャンプは子どもたちやその家族に、人生を変えるような体験を提供する。

のフィードバックに基づいて常に改善されているので、あるキャンプのよい実践がほかのキャンプにも広がることを期待されるのである。

また、これとは別に協会としてキャンプの効果に関する調査も継続的に行っている。これは、協会が継続的に発展するために非常に重要なものである。この結果をもとに、それぞれのキャンプが個々のプログラムの効果についての理解を深めることを支援したり、新しいサービスを考えたりすることは、協会の大きな役割のひとつである。

基準や結果に注目することは、組織に対する信頼性の向上、マネジメントの改善、資金集めといった組織運営にとって重要な要素になっているし、重い病気の子どもやその家族に人生を変えるような体験を提供するという協会の使命を再確認することにもつながっている。

6. 成長する世界的ネットワーク

Hole in the Wall Camps はこれまでも急成長を果たしてきたが、世界中の個人、団体とさらに多くのプログラムが提供できるように努力を続けている。もちろん、新しくメンバーになると思えば、ほかのキャンプと同様に厳しい基準をクリアしなければならない。準備段階から正式なメンバーになるまでをサポートするために、協会はコンサルティングを行ったり、必要な情報提供を行っている。

そうした支援のひとつとして、当初「バーチャル・キャンプ (Virtual camping)」と呼ばれた、「キャンプ・オン・ザ・ムーブ・プログラム (The Camp on the Move program) がある。

これは、正式メンバーを目指しているキャンプが、その地域の子どもたちを募集し、すでに正式

メンバーであるキャンプに招待するものである。これによって、キャンパーやスタッフ、ボランティアの募集や理事会の構成、資金集め、医療面でのパートナーシップなど、事前を知っておく必要のあることがらを学ぶことができるのである。それだけでなく、このプログラムは新しいキャンプのキャンパーとなり得る子どもや家族との関係を作るだけでなく、支援者を募り、地域での信頼を築くことにも役立つ。これによって、まだ施設や具体的プログラムが存在しないときから、キャンプを提供する実践的経験をすることができるのである。

新しいキャンプの取り組みは世界中で行われており、これまでの7年間に、このプログラムによって600人を超える子どもたちが、火のそばで歌をうたい、新しい友だちに出会うというキャンプの体験をした。

また、新しい試みとして、「グローバル・パートナーシップ・イニシアティブ (Global Partnership Initiatives)」も始められた。これは発展途上の地域にいる子どもたちの社会的なニーズに対応する、その地域の文化にあわせたキャンプを行うものである。

このプログラムでは、伝統的なキャンプの活動に加えて、ライフスキル (生活技能) や病気についての教育の内容が含まれる。具体的には HIV/AIDS の被害が大きい地域において、HIV/AIDS がどのようなものかということや治療を続けることの大切さ、暴力や薬物を避けるための方法を学ぶといったことも含めてプログラムを行うというものである。その成果は子どもたちが楽観的な感覚、希望を持つことができるということで、それはほかの Hole in the Wall Camps と何ら変わるところ

はない。子どもたちが希望を持って前向きに生きることができるよう、キャンプを通じて楽しみの感情や興味を再びわき上がらせ、元気づけるとともに、どのようにして必要な情報を得た上で決断するか、どのように彼らを取り囲む環境をよいものにしていくかを教えていく。

アウトリーチのプログラム（ターゲットのところへ出向いて行うプログラムのこと）はこれだけではない。「すべての子どもたちはキャンプを経験する権利を持っている」との思いで、キャンプに参加することのできない子どもたちがキャンプの雰囲気を楽しむことのできるプログラムも新たに始めた。これによって、病気のために病院から一歩も出ることのできない子どもたちにも、Hole in the Wall Camps の経験を提供しているのである。

重い病気の子どもたちは、常に「病気の子ども」として扱われてしまいがちで、そのことが子どもたちの成長に影響を与えることも少なくない。しかし、キャンプにはそのような子どもたちの人生をも変える力がある。

Hole in the Wall Camps の活動は、Newman's Own 財団や世界中のサポーターたちの支援を受けて成長を続けている。私たちは最高を求める実践を積み重ねることで、子どもたちの人生を変える体験をより多く提供できるだろう。重い病気の子どもたちが、ただ純粋に「子ども」でいられるように！

【WEB】

Newman's Own foundation

<http://newmansownfoundation.org/>

Association of Hole in the Wall Camps

<http://www.holeinthewallcamps.org/>

【写真提供】

Barretstown (アイルランド)

<http://www.barretstown.org/>

Over the Wall (英国)

<http://www.otw.org.uk/>

Dynamo Camp (イタリア)

<http://www.dynamocamp.org/>

Victory Junction (米国)

<http://www.victoryjunction.org/>

Bátor Tábor (ハンガリー)

<http://www.batortabor.hu/>

資料

「キャンプ研究」投稿規程

平成23年7月1日改訂
日本キャンプ協会調査・安全委員会

【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、本協会の会員に限る。ただし、調査・安全委員会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
 - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
 - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものともみなす。
 - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
 - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
 - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
 - 4) その他、調査・安全委員会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
 - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
 - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
 - (1) 体裁は、A4版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
 - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12項以内（1項1600字以内）、実践報告は8項以内を原則とする。
 - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
 - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
 - (5) 要旨（200語以上300語以内）とキーワード（5語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
 - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例¹⁾」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

（記載例）

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野村一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野村次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野村三郎（2010）野外生活技術、野村一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。
- (1) 研究論文の掲載の採択は、調査・安全委員会が委嘱する査読者2名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
 - 1) 研究論文の体裁に関して、調査・安全委員会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
 - 2) 各査読者による審査結果は、次の4つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
 - 「A そのまま掲載可能」
 - 「B 一部修正すれば掲載可能」
 - 「C 大幅に修正可能ならば掲載可能」
 - 「D 掲載不可」
 - 3) 2名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
 - 4) 上記3)に当てはまらない場合のみ、2名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき3回までに満たされなかった場合は不採択とする。
 - (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、調査・安全委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
 - (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（複製権、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、社団法人日本キャンプ協会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。
- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計3部（オリジナル1部、コピー2部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
 - (2) 投稿料は、研究論文および実践報告ともに5,000円とする。

（投稿原稿の送付先・問い合わせ先）

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内
社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

（投稿料・臨時会費の振込口座）

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 社団法人日本キャンプ協会

*通信欄に「キャンプ研究投稿料等」と記載すること

資料◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻 (1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察
●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告
●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告
●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻 (1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創

[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する

[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号 (1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号 (1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助

[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分に及ぼす影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学びの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号 (2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターばちばちハウス リフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号 (2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ

[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号 (2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾-新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみ-

[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号 (2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンパク大学の幼児キャンプ ●“共育”活動としての幼少児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～

[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号 (2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ-馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討- ●人と人 つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鷺敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷺敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号 (2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発-港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み-

●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ

[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●親子いきいきフレッシュキャンプ事業中止から学ぶこと ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から―

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(I)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から― ●子どもと共に創るキャンプ(II)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(III)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山YMCAファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006―第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入したASEが参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふおーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ2702 ☆事業の試みから― ●ユニバーサルキャンプ2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第10巻第3号(2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初のWEA野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第 11 巻第 1 号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 - 第 11 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ● 2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ● 日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ● アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ● 最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ● 2007 ACA National Conference 参加報告 ● 日本キャンプ協会国際交流委員会の働き - AOCF 創立 - ● "WILDERNESS FIRST RESPONDER" 野外救急法資格取得コース ● 組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ● 看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ● デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ● クラブ活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ● 学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ● 大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ● ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告
[ポスター発表] ● 少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ● 組織キャンプの魅力に関する研究 - 花山キャンプを事例として - ● 中学校における教科と自然体験活動の関連について ● キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ● キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的変化と自己評価 ● サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ - 10 年の軌跡 -

■第 11 巻第 2 号 (2007/9/30)

[実践報告] ● あさお冒険クラブの仲間づくりとエコ・キャンプをめざして - 野外活動を通して気づくこと -
[研究資料] ● キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ● 障害者キャンプにおけるバリアの研究 - 身体障害者模擬患者を通して - ● キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第 11 巻第 3 号 (2008/1/30)

[特集] ● 不揃いの麦から作るビールの味には深みがある
[実践報告] ● キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から -
[研究資料] ● クラブ活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ● 外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響
[報告] ● 第 11 回日本キャンプ会議全体報告 - みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) -

■第 12 巻第 1 号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 - 第 12 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ● 指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ● 民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ● キャンプ参加費に関する保護者の意識 ● 米国サマーキャンプの日課活動 (実修) について - メイン州、キャンプ・オーアトカの場合 - ● 知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ● ガンバレ! 能登 震災支援キャンプ報告 ● 冬の陣と雪の吟 - 「雪のスゴイ!」を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008」 ● ぼるぼるキッズ 2007 実践報告 ● 日本の野外活動に対する中国の (小学 - 大学) 男女学生の認知度 ● 「社会力」を育成する教育プログラムの開発 - プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して - ● 連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ● 新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ● ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告 - 他団体との連携と運営のポイントに着目して - ● 『若者自立支援事業「本当にやりたい! ことプロジェクト」実践報告』 ● サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクト - 余島プロジェクト - ● 「読書」による観想的キャンプ生活 - 中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目して -
[ポスター発表] ● 利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ● 地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ● 自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ● 日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - キャンプが青少年の成長に及ぼす効果 - ● 日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - プログラムと自然・生活環境に着目して - ● 日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - 参加者と指導者に着目して -

■第 12 巻第 2 号 (2008/9/30)

[実践報告] ● 幼児キャンプの実践 ● キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第 12 巻第 3 号 (2009/1/31)

[実践報告] ● 子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識 - 不満足評価の視点に着目して -
[報告] ● キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ● 第 12 回日本キャンプ会議全体報告 - みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) -

■第 13 巻第 1 号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 - 第 13 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ● 組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割 - 米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム - ● 病気とたたかう子どもたちに夢のキャンプを - 医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組み - ● 休止スキー場を活用したキャンプの試み - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から - ● 指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ● 組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ● ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ● 中国における野外専門運動基地の現状 - 天津市山野運動基地 - ● 実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ● 教員・保育者を目指す女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ● 活動の質を高めるチャレンジとリラック

スの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える (1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～ [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～ ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ●Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～ ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13巻第2号 (2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (安全管理編)～

■第14巻第1号 (2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALT プログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership 参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカントリースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について

[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

■第14巻第2号 (2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後に生かせる対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

◆ CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

■第1回日本キャンプ会議 (1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸ー東京)中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第2回日本キャンプ会議（1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪（マキ）の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察
●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて
●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について（2）

[報告の部] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後（1） ●フロンティアアドベンチャー事業のその後（2） ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第3回日本キャンプ会議（1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●台湾における童軍（ボーイスカウト）教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開
●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育の森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える（Ⅱ）～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議（2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター）

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議（2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み
●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営－YMCA プロジェクト・SEEDのケース－ ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議（2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み～ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプとする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告－アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議（2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ2003 ●長期キャンプ“わんぱく子ども宿（10泊11日）”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法2 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議（2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぴーすキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集めるCAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告

■ Camp Meeting in Japan 2005 ー第 9 回日本キャンプ会議（2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告●第 12 回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004 夏の体験学習夏！君の勇気にか・ん・ば・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成（映像発表） ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動（私の体験） ●OBS プログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟（ACF）の創立

■ Camp Meeting in Japan 2011 ー第 15 回日本キャンプ会議（2011/9/22 ～ 25、静岡県立朝霧野外活動センター）

※第 15 回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立 45 周年記念 第 20 回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

※ Camp Meeting in Japan 2006 ー第 10 回日本キャンプ会議より、発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

・『キャンプ研究』 各 1,000 円（税・送料込み）

・『日本キャンプ会議抄録集』 各 1,000 円（税・送料込み）

※第 1 回～第 5 回日本キャンプ会議抄録集の在庫はなくなりました。

※『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号の在庫はなくなりました。

キャンプ研究第 15 巻を読んで

「癒し」。この言葉には「ケア」「セラピー」などの意味も含まれています。この「癒し」「ケア」「セラピー」という点を根っこに持って取り組まれているキャンプ活動を、最近多く見かけます。この傾向は、昨年 3 月 11 日に起こった東日本大震災と、それに端を発した福島での原発事故の発生後に特に強く見られるようになりました。それは、被災地の方々が抱えるようになってしまった心身の弊害への配慮や手当てなどの一環として、キャンプが活用されていることにあると思います。

このような背景もあって、本号では特集として「グリーフキャンプ」について取り上げています。坂本昭裕さんの論文は、グリーフについての基本的な考え方、また子ども達におけるグリーフの理解について示しており、キャンプに関わる大人達がこれらの知識をよくふまえた上で、被災した子ども達の喪失体験をどのように捉えて、どう関わっていくべきかについての重要な示唆を与えています。また、もう一編は、日本キャンプ協会における「グリーフキャンプ」の今後の取り組みについて、アメリカでの先駆的实践 (El Tesoro de la Vida キャンプ) の紹介を交えて書かれています。「グリーフキャンプ」という言葉を使っているか否かに関わらず、特に今回の被災者をはじめとする喪失体験をもつ人達を対象とするこのような取り組みは、今後もさらに重要になっていくと思われまます。キャンプ協会によるこれからの「グリーフキャンプ」の実践は、志を共にする人達や団体・組織にある道を示し勇気を与えていくという、日本での牽引的役割を担っていくことなのでしょう。

本号では、上記の特集に加えて 4 題の実践報告を掲載しています。テリー・ディグナンさんの寄稿は、病児を対象とするキャンプの世界的ネットワークである「Hole in the Wall Camps」を紹介したものです。この実践も「癒し」(ケア・セラピー)に関わる実践の一つであります。報告にある病児はもとより、社会的に弱い立場にある人達に対し、これまで以上にキャンプへの参加機会を作り、人生の中に楽しさや喜びを創出することで、生活の質の向上に寄与していく試みの必要性を再認識しました。また、西島大祐さんの論文は、キャンプの指導者資格を取得した教員や保育者を対象として、キャンプの知識や技術が各々の教育現場でどのように活用されているかについて調査したものでした。調査対象者が限定され、その結果も限られたものではあります。指導者研修のあり方についてある一定の示唆を与えてくれる、意義のある資料になるでしょう。さらに、仁藤喜久子さんからは、自らが勤務する大学の学生を対象とした野外活動をベースとする宿泊研修とその意識調査について、また川口博行さんからは、カンボジアでのキャンプ実践の現状が紹介されています。両者ともに、独自の事例を示すことで、キャンプや野外活動の実践や考え方における基礎資料として供されることなのでしょう。

特集にも見られるように、本号は昨年の東日本大震災や原発事故の社会状況を受けて、それに深く関わった内容となりました。最後になりますが、東日本大震災で被災された皆さまに、心からお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。そして、「癒し」の潜在的効果を持つと考えられるキャンプ(または、「グリーフキャンプ」)の今後の取り組みが、少しでも被災者の方々の生きていく上での力や支えの一助になることを強く祈りたいと思います。
(東京学芸大学・小森 伸一)

キャンプ研究

第 15 巻

2012 年 1 月 31 日発行

編集発行者 (社) 日本キャンプ協会 調査・安全委員会
発行所 社団法人日本キャンプ協会
NATIONAL CAMPING ASSOCIATION OF JAPAN



NCAJ

National Camping Association of Japan

〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
TEL 03-3469-0217
FAX 03-3469-0504
E-mail ncaj@camping.or.jp

© 社団法人日本キャンプ協会 写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。

ISBN978-4-904008-05-8
C9075 ¥953E



9784904008058



1929075009536

キャンプ研究

第15巻
2012年1月発行

▲特集 グリーフキャンプ
子ども達の悲しみを支えるということ
ーグリーフキャンプの試みにむけてー
坂本 昭裕

東日本大震災の被災者を対象とするグリーフキャンプの取り組み

▲実践報告
キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み
西島 大祐

大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題
仁藤喜久子

カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状
川口 博行

Hole in the Wall Camps
～病児キャンプの世界的ネットワーク～
テリー・ディグナン



NCAJ

National Camping Association of Japan

社団法人日本キャンプ協会

定価 1,000円(本体953円)